

力

薄田泣菫作



二十五卷

75

70

65

60

本
文
D

〇〇〇

〇〇

十

五

絃



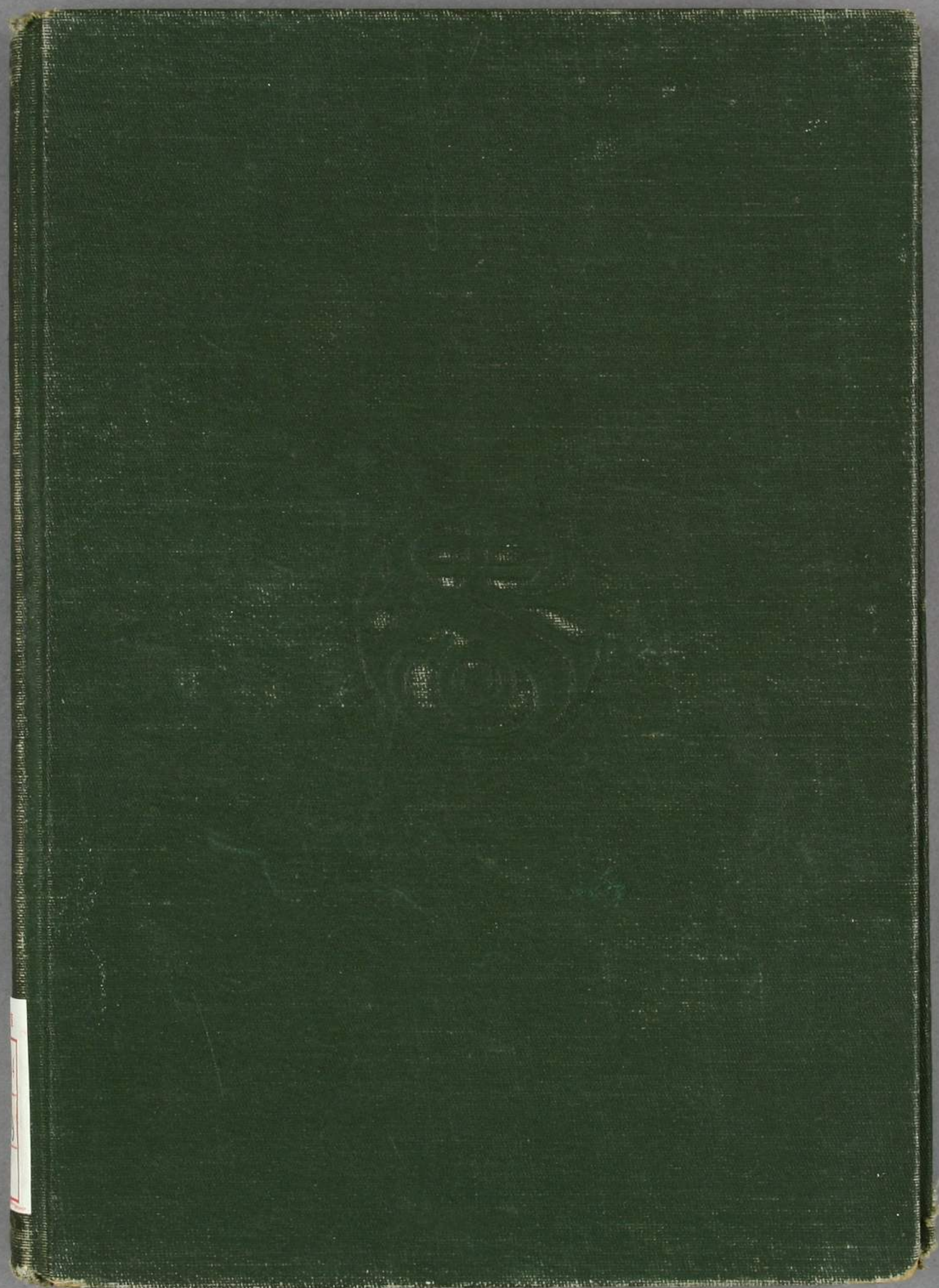
泣

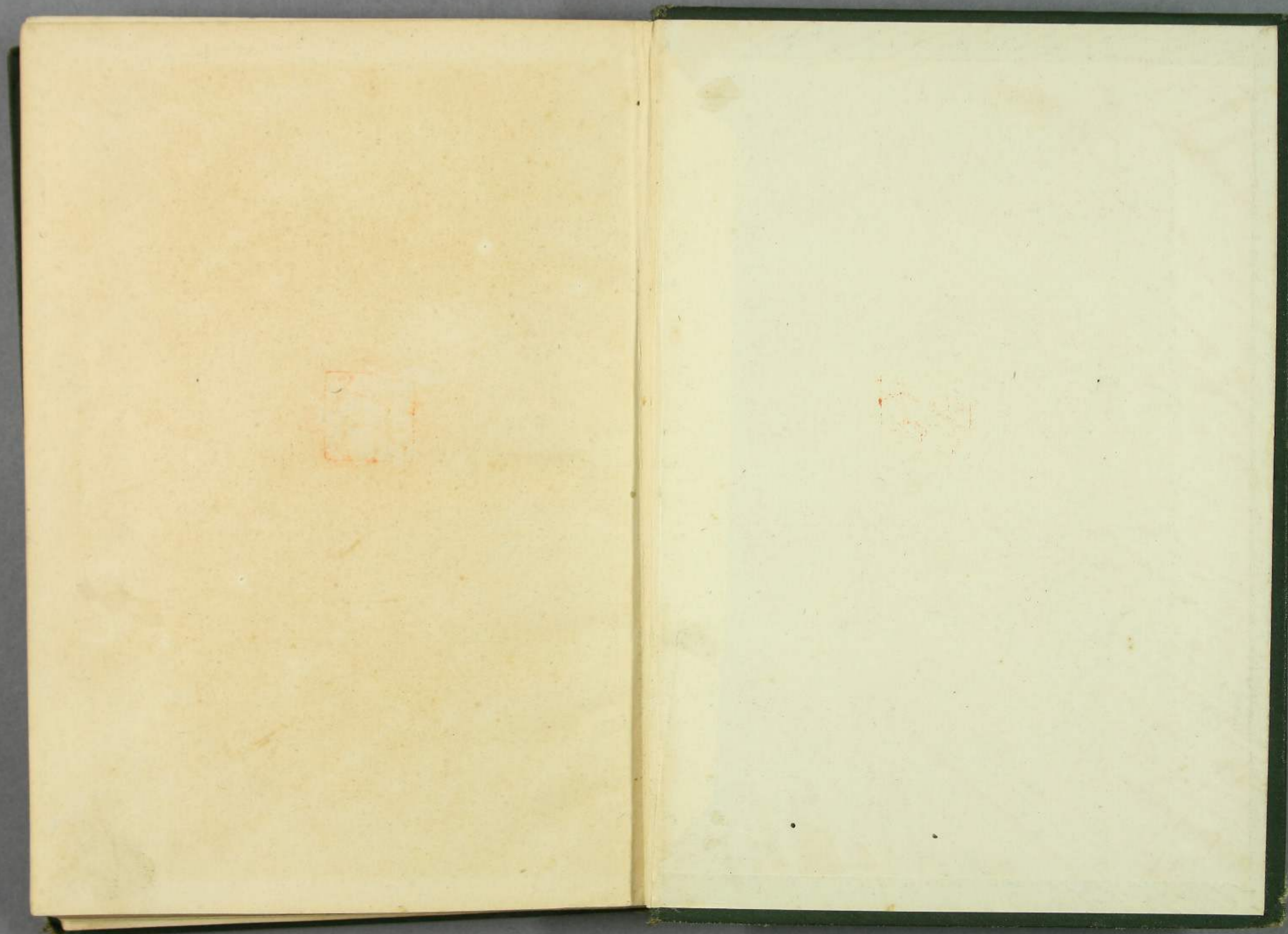
本間文庫

文庫 14

D 199

〇〇〇







二十五絃

薄田泣菫著

文庫14
D 199

この度の大御軍に加はれるわが弟に

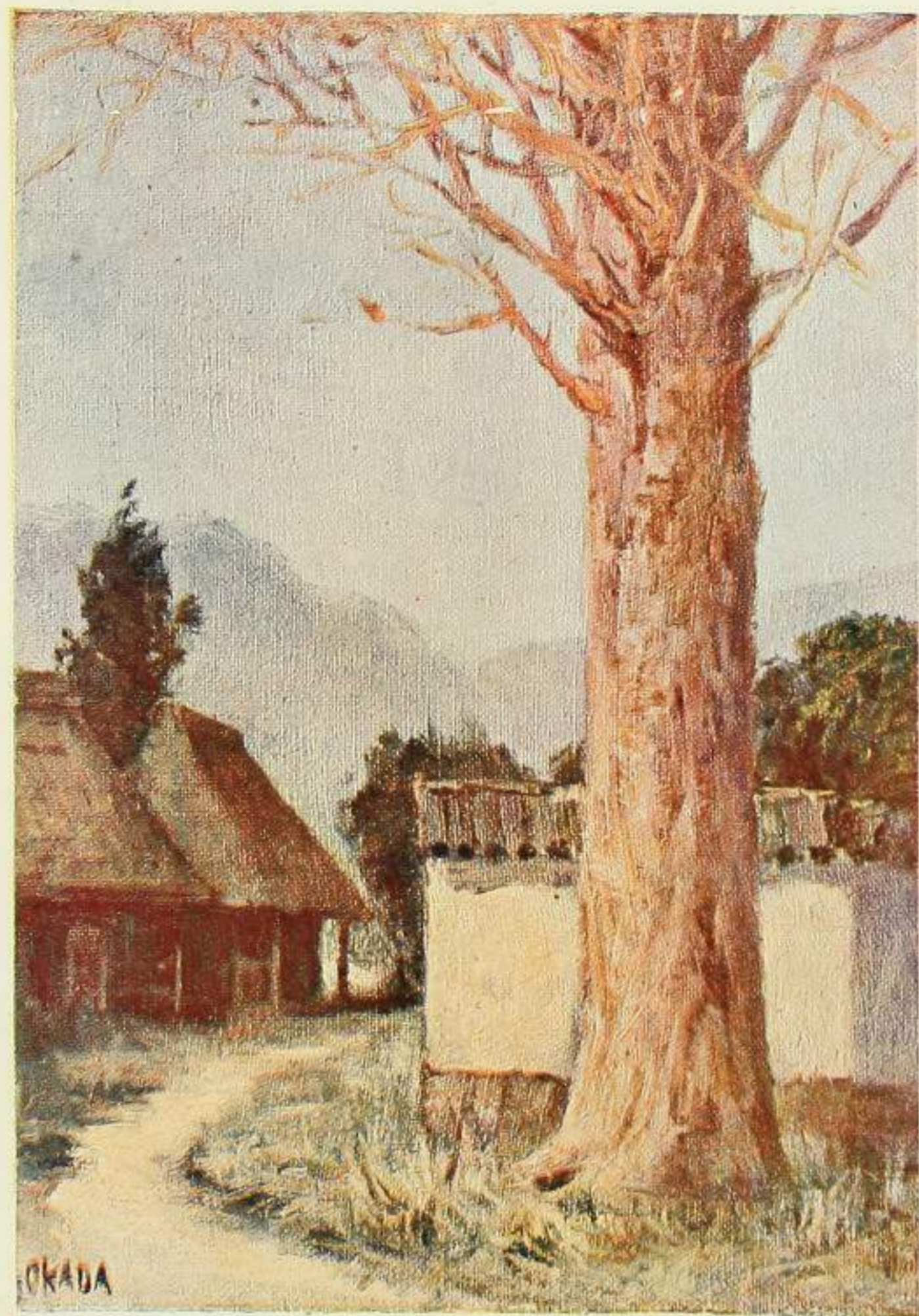
目次

公孫樹下にたちて	一
二月の一夜	二三
五月の一夜	三三
翡翠の賦	三三
雷神の歌	三九
金剛山の歌	八三
天馳使の歌	一〇一
一、なかだえ	一〇一

二、あまくだり	一五五
おもひで	一五二
おもかけ	一五六
をろの鏡	一七七
戀どころ	一八〇
戀のわな	一八八
貧しき浦里にして	一九一
白膠木もみぢ	一九五
もぐらもち	一九六
霜月の一日	一九九

霜月の一夕	二〇三
花うり女	二一〇
おもかけ	二一四
澤潟の歌	二一七
ことうた	二二〇
一、待心	二二〇
三、海女	二二二
三、紅梅	二二三
暮秋野徑の石にもたれて	二二三
神無月の一夜	二二六

神無月の一	二五〇
虹の歌	二五一
一、旅人	二五二
二、獵人	二五九
三、情人	二六七
四、海人	二八〇
五、農人	二八八
六、隱者	二九八



新築の一日
 一、五人
 二、五人
 三、五人
 四、五人
 五、五人
 六、五人

新築の一日
 一、五人
 二、五人
 三、五人
 四、五人
 五、五人
 六、五人

二十五絃

薄田泣堇作

公孫樹下にたちて

あゝ日は彼方伊太利の
七つの丘の古跡や

圓き柱に照りはえて、
石床しろき回廊の
さざはし狭に居ぐらせる、
青地襪樓の乞食らが、
月を経て來む降誕祭、
市の施物を夢みつゝ、
ほくそ笑する顔や射む。
あゝ日は彼方北海の
波の穂がしら爪じろに、
ぬすみに獵る蟹が子の、

氷雨もよひの日こそ來れ、
幸は足りぬと直むきに、
南へかへる舟よそひ、
破れの帆脚や照すらむ。
こゝには久米の皿山の
嶺どしにさす影を、
肩にまとへる银杏の樹、
向脛ふとく高らかに、
青きみ空にそゝりたる、
見れば鎧へる神の子の

陣に立てるに似たりけり。

二

こゝ美作の高原や、
國のさかひの那義山の
谿にこもれる初嵐、
ひと日高みの朝戸出に、
遠く銀杏のかげを見て、
あな誇りかの物めきや、
わが手力は知らじかと、

軍もよひの角笛を、
木木に空門に吹きどよめ、
家の子あまた集へ来て、
黒尾峠の懸路より、
風下小野のならば田に、
穂波なびきてさやぐまで、
勢あらく攻めよれば、
あなや大樹のやなぐひの
黄金の矢束鳴だかに、
諸肩つよく搖ぎつゝ、

賤しきものゝ逆らひに、
滅びはつべき吾が世かと、
あざけり笑ふどよもしや、
矢種皆がらかたむけて、
射繼早なるおろし矢に
射ずくめられし北風は、
またも新手をささがけに、
雄詰たかく手突矢の
鏃ひかめく圍みうち。
頃は小春の眞晝すぎ、

因幡さかひを立ちいで、
晴れ渡りたる大空を、
南の吉備へはしる雲、
白き額をうつぶしに、
下なる邦のあらそひの
なじかはさのみ忙しなと、
心うれひに堪へずして、
願みがちに急ぐらむ。

黄泉の洞なる戀人に、

生命の水を掬ばむと、
七つの關の路守に、
冠と衣を奪はれて、

『あらと』の邦におりゆきし、
生身素肌の神の如、

あゝ争ひの七八日、

銀杏は征矢を射つくして、

雄々しや、空手真裸に、

ほまれの創の諸肩を、

さむき入日にいろどりて、

み冬の領にまたがりぬ。

三

あゝ名と戀と歡樂と、

夢のもろきにまがふ世に、

いかに雄々しき實在の

眩きばかりの證明ぞや。

夏とことには絶ゆるなく、

青きを枝にかへすとも、

冬とことには盡くるなく、

つねにその葉を震ひ去り、
さては八千歳靈木の
背の創は癒えずして、
戦ひとはに新らしく、
はた勇ましく繰りかへる。

銀杏よ、汝常磐樹の
神のめぐみの緑葉を、
霜に誇るにくらべては、
いかに自然の健兒ぞや。

われら願はく狗兒の
乳のしたゝりに媚ぶる如
心よわくも平和の
小さき名をば呼ばざらむ。
絶ゆる隙なきたゝかひに、
馴れし心の驕りこそ、
ながき吾世のながらへの
榮ぞ、價値ぞ、幸福ぞ。
公孫樹よ、汝のかけに来て、
何かも知らぬ睦魂の

よろこび胸に溢るゝに、
許せよ、幹をかき抱き、
長き千代にも更へがたの
刹那の酔にあくがれむ。

(三十四年十月、作州
津山の近ほとりに)

二月の一夜

きさらぎ寒のゆふべや、
牧のうなるも通はね、
眺めよ、寂しき末黒小野に、
さゝら河門水かれて、
濕ひ足らぬ荒びや、
長風のかざ吹羽むけ強に、
根白たか萱うら葉の

いたづらさやぎにさゝと鳴りぬ。

二

かなた天路のはづれに、
白衣の靡きゆららに、
今宵し六日のかたわれ月、
（さはあえかなる病女の
夕眺めするなよびや）
さ青のまなじり伏目がちに、
吾世すがれの悲み、――

吐息もするやと惑はしむる。

三

あなせつなさの今宵や、
野もせに靡くさびれの
身に泌み入りては心弱に、
別れし人のおもかけ、
くづをれ泣きし身様の
それさへ正目にながめられて、
思ひ出いたき昔日の

嘆きよふたゝび浮び來ぬる。

四

わが魂の住家は、
大み慈悲の胸なれば、
人の世み冬の今をさむみ、
旅路の小草しをれて、
眺めよ、さのみ荒るゝも、
なじかは行方を咀ふべしや、
その御力にひかれて、

吾世を高みの春へこそは。

五

そこには救世の御佛
阿摩の如くよりそひて、
おほ慈悲垂乳のいく薬に、
咽の渴きをうるほし、
ま玉なせる掌に、
生身の肌をいたはりつゝ、
血汐に染める深手を、

癒えよと和らになだめ給ふ。

六

そこしも不壞の新世、
清きものは甦り、
優女も法衣のすがた花に、
菩提樹かづらかざして、
あな和魂の片身やと、
胸乳のふらくみ區むまで、
眞白手しかと擁きて、

さこそは注がめ嬉しなみだ。

七

仇し世空華のながめに、
路惑しを据うるも、
あくがれ心の踊躍いかに、
その誘ひに落ちめや、
遠里小野の野越に、
鳩の子古巢にかへることく、
わが魂の伸羽こそ、

いづくをゆくへと辨へ知れ。

八

この末黒野のゆふぐれ、
二月寒のさびれに、
よろづの實母おほみ慈悲の
ふところ深に隠れて、
やがても往かひ彼方の
常春あけぼの望み得るぞ、
吾世の秘密——憂身の

光や、日も夜も酔ひてあらめ。

(三十七年二月)

五月の一夜

一

吾が凭る小野の野づかさ、
麓つゞきの茅原に、
夕ぐれ五月の闇をふかみ、
眞夏の女神筒姫、

獨りずまひのなぐさや、
夜殿の香爐のかをり高に、
野薔薇空にくゆりて、
まよはし深きも所がらや。

二

こなた右手なる側、
圓葉柳のしげみに、
夏野の色鳥ねぐらすすや、
夢かの心地こそろと、

忍び羽振のさゝめき、――
響きよさながら消ぬる程に、
深まりわたる静けさ、
天路の足音も聞きや得まし。

三

この五月野の夕ぐれ、
人酔はしめの眺めに、
夜頃は踴躍の心地しつれ、
今宵はいかに思ひの

うら寂しさに堪へじか、——
そは、わが道びき、大み慈悲の
光よ、とみに隠れて、
さてこそ弱げさ忍びぬれば。

四

あゝ光明の御姿、
夢をぼろしと消ぬる日、
わが世は空洞の實なし小具、
一味の海のひたりも、

縁はあらぬなづさひ、——
時劫の濱邊にひとり立ちて、
身にしも逼る海路の
さびしき廣みに心いたむ。

五

眞玉花瓶手もろに、
轉びがちなるならひや、
あくがれ心の扉ふかく、
齋きまつりし操の

歸依しも未だ足らじや、
わが道伴なき世にしあれば、
うき身夜な夜な御影に、
注ぎし涙は知るしめさめ。

六

くづをれ、——さては自ら
ほしいまゝなる願ひに、
たゞよひ心地の束のひまを、
沈黙よ、胸のふかみに、

今しも低きさゝやき、——
月白ほのかに匂ひわたる
この夕暮の刹那や、
あるひは吾世のすがたならぬ。

七

宵闇やをら離れて、
星まだらなる高みに、
きよらの月映照の色や、
眞夏の女神筒姫、

大殿おほどのごもる野のづらに、
白しろがね被衣かろぎの靡なびきゆらに、
匂におひ香空がそらにながれて、
夢ゆめの氣けこゝにも浮うかび來きつれ。

八

わが魂たましひにくゆりし
大御光おほみひかりのしたゝり、
今いまはた燃もりのほのにあれど、
なほ人ひとの世よの旅たびゆき、

くらやみ路みちのたづきや。
内うちなる火照ほてりにぬくめられて、
いつかは炎ほのほさかりに、
燃もえこそあがらめ靈れいの烽火のろし。

九

其日そのひよ光ひかりあふれて、
生身いきみさながら法のりの身み、
み空そらの立樂たちがくやがてこゝに、
心こころの絃いしの高鳴たかなり。

生命はつよく躍りて、
春海の満潮さほひ荒に、
いたるや不壊の新代、
解脱の常宮——歌の御園。

+

わが世秘密の許され、
その日の幸をいさみに、
こよひは野中にひざまづきて、
夢見心地のあくがれ、

御影にいつく比丘尼の
操にたらへる心ばへに、
胸なる籠のあかりや、
守りて静かに小夜は經まし。

(三十七年五月)

翡翠の賦

流ゆるさ枝河の

根やはら小菅かすれて、
靡葉そよるとさやぐ夕、
眉根しろき罔象の女、
蟲の衣ぬぎ捨に、
童氣すがたに倣ふほとり、
見ずや、かなた翡翠の
樹蔭にかくるゝ征矢の形を。

二
美しきもの常久に、

可^あ惜^{たら}身^みなりや、翡^か翠^{せみ}の
か^いま^み許^{ゆる}さぬ花^{はな}のすがた、
照^{てり}斑^ふあをき冠^{かむり}毛^げや、
瑠^る璃^り色^{いろ}背^せにながれて、
さながら水^み曲^{わだ}の水^み脈^みにまがひ、
はた長^{なが}嘴^{はし}の爪^{つま}紅^{べに}は、
零^{れい}露^ろを啜^{すす}るにふさひたりな。

三
葉^は分の光^{ひかり}はだらに、

白き菱の花さして、
樹暗もあからむ夏の真晝、
水馬うかべる水隠れ、
藻伏小鮒とらへ来て、
朱脛やすらふ柳瑞枝、
玄たり顔の若音には、
葉守の神さへ酔に入らむ。

(とらへる又日なが)

蜻蛉田づらに疲れて、

真菰うら葉にやすらひ、
鼠尾草、鶯草露にぬれて、
匂ひ香しめる水際の
繁みがくれの巢ごもり、
夕月さし入る静夜には、
夢こそかよへ、御親の
自然の胸なるふかき夢に。

五
そよやむかし乙姫が、

ほたれの氏を厭ひて、
尼そぎ艶なる御寺ごもり、
御燈さゝぐる夜な夜な、
物忌守りし和魂の
化生か、翡翠人氣見ては、
知らず顔の面もちに、
など然は素氣なく暗に去るや。

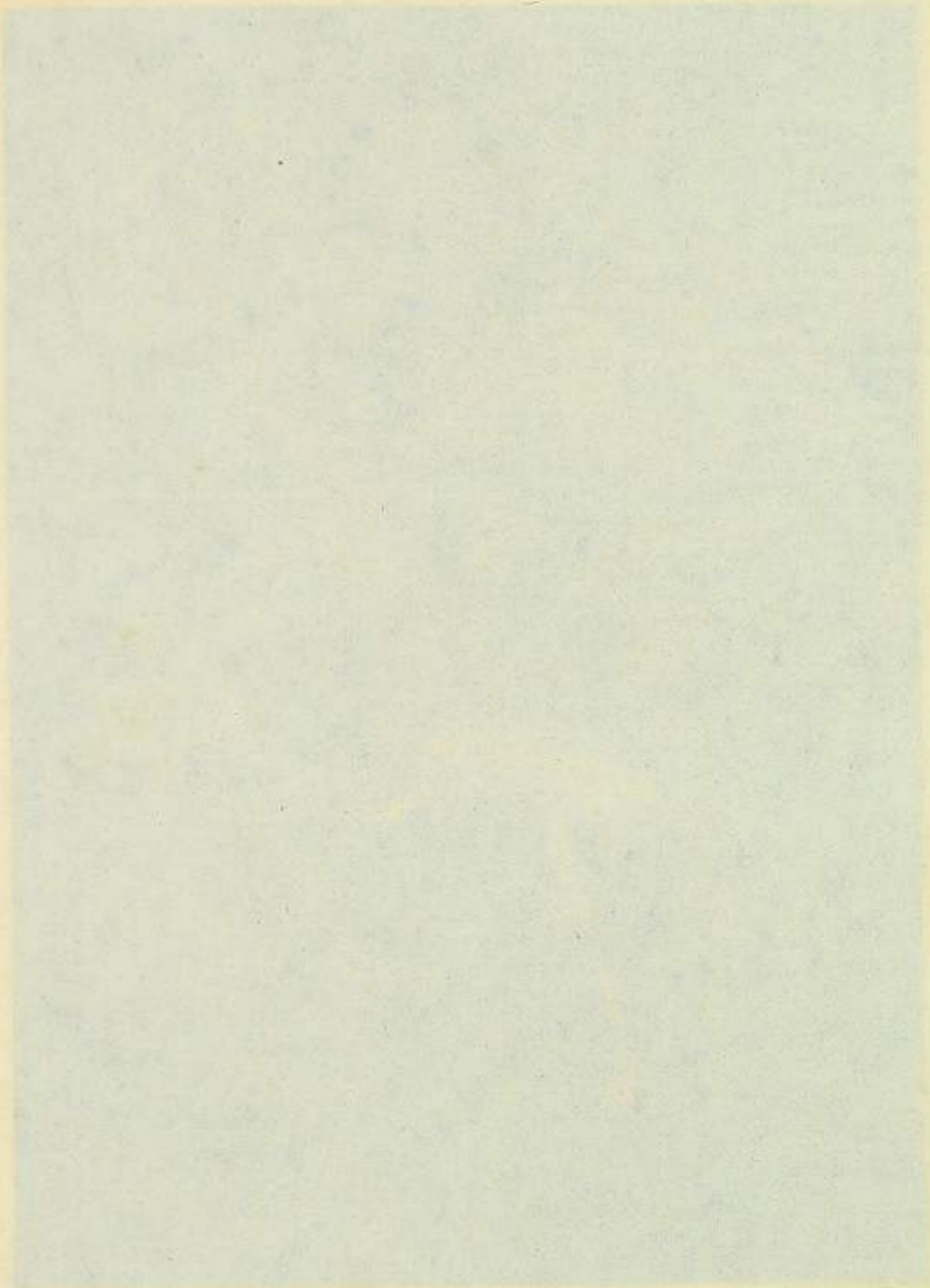
六

高音さへづる雲雀の

天飛ぶ風も戀ひねば、
巢造りさかしき巧み鳥の
里居なづむも倣はず、
寂しいかな、川隈の
繁みがなかをば往きかへりて、
嚙みがちなる慣ひや、
胸には無量の秘密あらむ。

七

秘密よ、いかに清らに、



はた尊たうとかる寶たからや、
水の面おもてに落おちなば花はなとひらき、
染しみて水みづ銹さびも薰かほらめど、
散ちる日ひげにや惜をしからむ。
さればや包つむに和毛にじげまろう
聖まき籠かごと胸むね縫ぬひて、
まもるに靈れいある翼つばさそへぬ。

(三十六年七月)



はたけのうらやま
水田に落ちたはたけのうらやま
あふて水田も荒れり
散る日々にや情しからば
さよはせやむはれはたけのうらやま
あふて水田も荒れり
あふて水田も荒れり
あふて水田も荒れり

三十七月

雷神の歌

ことし一月十七日、空に雷鳴ありて、大粒の霰さへ
おびたしく降り注ぎぬ。春雷と名けむには餘り
に時はやかるべし。當時病みて床にあり、覺えず興
に入りたるまゝ、病おこたるを待ちてこの篇をも
のしぬ。

秋も静かに暮れゆけば、
わが世は來ぬと、白がねの
羽衣ゆらにひきはへて、

天の御蔭をおりませる
み冬の女神白姫は、
やをら國見の目蔭して、
國原とほく眺めしが、
『み山はざまに葉ずくなの
木原は風にはらはれぬ、
遠里小野に高草の
みだれは野火に焦されぬ、
母よ、姉神染姫の
きのふの榮のおとろへを、

やがて吾世の一日か、
あな乙姫の幸なさ。』と
歎歎もよゝと打伏せば、
おほ空とみにかき曇り、
雲路とゝろの雪おこし、
天の柱に鳴りどよみ、
しろがねの花はらゝかに、
散り交ひしきる空亂れ、
あなやと見入る束の間に、
山も野づらも磯濱も、

白装しろまほひの花はなやぎに、

『こはさながらや、玉敷たましきの

都心みやここゝろになりはてぬ、

母宮はみやとはに榮さかあれ、

わが世よは君きみのみなさけに

斯かくこそあれ、』と白姫しらひめは、

夕ゆふ闇やみふかき水沼みづぬまより、

そよろとあがる白鷺しろさぎの

羽衣はごろもかるくひるがへし、

天あまそゝり立つ富士ふじが根ねの

險けしき嶺みねにおりたちて、

去年こぞの宮居みやゐに入りませば、

御垣みかき守もりする舍人とねりこの

寒みぞれしらす雪ゆきはた霞あられ、

面魂つらたましひの醜男しじならは、

み階はしのもとに侍さむらひて、

今日けふを初日はつひの大御代おほみよの

鎮しづまりわたる平和やはらに、

事ことあれ顔かほに身みがまへぬ。

こゝはみ冬の^{ふゆ}大宮^{おほみや}を、
戌亥^{いせ}に見^みたる空^{そら}のうへ、
雲^{くも}の戸^と五百^{いほ}重^へさし閉^とぢて、
百^も日^か百^も夜^よの籠^{こもり}居^ゐや、
吹^ふき透^すく風^{かぜ}の寒^{さむ}がり、
虎斑^{とらふ}星^{ほし}白^{しろ}まだら毛^けの
毛^け衣^{ころも}ふかくひき被^かぎ、
寝^ね様^{さま}まろなる霹^は靨^た神^{がみ}。
胸^{むね}にゑがくは水^{みづ}無^な月^{つき}の

青^{あお}葉^はさしたる山^{やま}越^こえて、
遠^{とほ}乗^のりあるく夏^{なつ}の夢^{ゆめ}。

夢の卷

思^{おも}へば、ひかし吾^{わが}母^{はは}の
玉^{たま}依^{より}姫^{ひめ}よ、唯^{ただ}ひとり、
しるがね籠^{かたみ}携^{たづ}へて、
春^{はる}の日^ひながを野^のに山^{やま}に、
花^{はな}つみすさぶ途^{みち}すがら、
透^{すき}影^{かげ}きよき石^{いし}川^{かは}の

蟬せみの小河をがはの河岸かはぎしや、
圓葉柳まるばやなぎのかげにして、
水波みづなみゆらに流れよる
丹塗にぬりの矢柄やがらひろひ得て、
齋いらいきかへりし其日そのひより、
身みは徒たならずなりそめて、
産うみみし男子なんしぞ、荒あみ魂たま、
顔かほ逞たくましき吾身わがみなる。

乳離ちぢなれしけむ三歳みつの春はる

祖父おほぢ八尋やひろの屋やを築きき、
八やつの扉とびらをひきかため、
八十やそ氏うち人びとをつどへ來きて、
八や汐しほの酒さけを掬くみかはし、
七なな日か七なな夜よの酒さかほがひ、
一ひと花はな心こころ興きやうがりて、
吾われを腕かひなにかき擁いたき、
『あはれ孫うまこよ、處女をとめなる
玉依姫たまよりひめのおのづから、
身みごもりにたる汝なれか、はた

あらしや、さては客人に
覚えの父の顔あらば、
させよ。』とばかり給ひたる
盃はたと投げあけて、
『父はかなたに、その昔、
天のみ蔭の長ごもり、
わが世に飽きて人知れず、
糺の柱にくだりまし、
ひと日丹塗の矢となりて、
蟬の小河を流れたる

火の雷の命ぞ。』と、
小鬼の如く小躍りに、
棟の蕘を踏みやぶり、
雲路はるかに上り来て、
父の宮居にかへりしが、
ふり残されし氏は、
『あな畏しや、荒み魂、
別雷の命ぞ。』と、
御生の山の山もとに
御殿たかく築さあけ、

祭壇ひさに榮はえて、
人幸あれと、幾代にか、
齋きつぎにし神業や、
今日また馴れし物めきの
枕べ近くどよもすに、
雲戸のまより見おるせば、
あなや瑞枝の下がくれ、
黄金の鈴の桶の
花かぐはしく咲きくゆる、
都ほとりの驛路に、

新よそほひの人なだれ、
松尾山の諸かづら、
冠にかざす加茂衆や、
公卿の孫か白鞍の
近衛使の神まつり、
塗の轅の牛車、
花筒ゆらにたゆたひて、
廣前ちかく軋るにも、
今年も春は暮れゆきて、
今し五月の半ば頃、

吾世とこそは知られけれ。

御生の山の山もとの

氏人いかに心して、

いつきの宮の忌竹に、

さのみ別れを惜むとも、

春はふたゝび歸らめや。

見よ、くづをれの佐保姫は

峰越の路にゆきかへり、

麓木原にわけ入りて、

青葉のかげに隠れしが、

今また野路に現はれて、

花ふさふさにこき入れし

緑の袖をかき擁き、

夏かけ深き山こえて、

落つる姿の忙しなさ。

譬へば、師走晦日の夜、

速輦の瀬戸潮おちて、

岩根あらはに干る頃を、

苅和布神社の宮司らが、

白衣の袖をひきからげ、
松明のかげに鎌とりて、
荻るや和布の一にぎり、
また寄せかへる潮泡に、
驚きたちて逃ぐる如。

今し代繼の前追に、
龍馬躍りて、高天の
御階とゝるに曳きいづる
白がねの輪の飛車、

逸り男の夏の日は、
遠見の目蔭さしかざし、
「かなた、み空の脚もとに、
雲ならざるに漂ふは、
海か、幾代の敵なりき、
わが戦鬪の一の矢の
幸は汝に。」とほゝゑみて、
鋼鐵の弓を曳き絞り、
矢頃さだめて射かくれば、
矢は天がける隕石の

雲路のきはひ真下りに、
額青白き海神の
脾腹ぞ深に射貫きたる。
されば痛みの溜息か、
海に激しき聲ありて、
恨み怒りの眼ざしに、
氣色ばみたる海の神、
つと起ちあがる身ふるひに、
浪は崩れぬ逆さまぬ、
その勢に喉けて、

科戸の國を駈けいづる
強弓取の大風は、
廣き翼を羽ばたきて、
おほ空低うゆきかへる。

あゝ戦闘は始まりぬ、
駿河の國の庵原なる
不來見の濱の姫神が、
岩木の山の根に伏して、
秋の夜ふかく男の神は、

荒ぶる鬼の戯れに、
手兒の呼阪越えかねて、
荆小路に眠るやと、
神の名呼びて覺むる如、
あゝ戦鬪よ、夢にさへ、
思ひ出ては慕ひたる
戀しき友は汝なりき、
めぐり合ひつる今日よりは、
滅亡の日まで伴なへと、
長立たかき身をおこし、

裸の脊には九つの
天つ鼓をひき結び、
右手には長き電の
獵矢の束手にぎりて、
招けば黄泉の真洞より、
生絹かい裂く響して、
走りよりたる物の怪の
爪長、雷の鳥、
ふたりを従者に携へて、
脚は櫓か、高らかに、

立てるは黒き虹の橋。

見よ、戦鬪はたけなはに、
空をどよもす貝鉦や、

軍鼓のはためきに、

勢はたがひに入りみだれ、

打物ふるふ歩いくさ。

創手脾腹に負ひながら、

張魂の海神が、

しろがねの輪の飛車

浪の底にや沈めんと、
雲もよひの寒空に、
汐吹高く巻きあぐる
北なる海の鯨子の、
勢あらし息ざしに、
狭霧しとどに頻吹つゝ、
雨の腕をさしあげて、
玉の轆をうかへば、
あな雄心の日の神や、
焔の鞭をかざしては、

駒の蹄の高ゆきには、
天路とゝろと踏鳴し、
尻目に海を嘲りて、
勝ち誇りたる形姿。
時に陣場を退きて、
天の柱の片かげは、
息やすめする大風は、
時こそ來れとにこやかに、
廣き翼を張りあげて、
俄かにおこる中空や、

疲れ伏したる海の背に、
的射させじの楯板か、
端反陣笠かたむけて、
羽莖も脆にくだけよと、
打ちあららげし羽叩に、
霧はゆららの波寄に、
輪形をうちて巻きよれば、
息ぐるしきや、日の神は、
玉なす顔をそむけつゝ、
手綱かい繰る飛車、

轍の跡もしどろにて、
雲の門ふかく逃のびぬ。
外には黒きくらやみに、
うか狙ひよる大嵐、
海を誘ひて同音に、
『さて日の神の報強や、
雲の宮居の長どもり、
顔の深手の生癒を、
天つをとめに誇るか。』と、
嘲り笑ふ鯨波の聲

黄泉のはてもや動むらむ。

あゝ日の神は破られぬ、
下なる邦のともがらに、
任せはつべき高座か、
今大天の名のもとに、
戦ひすべき日こそ來れ、
『科戸の神も海神も、
鳴を鎮めて伺へよ、
吾ぞ弓矢の譽ある

別雷の命なる、
わが相殿の日の神の
負の軍を耻らひて、
加勢と名のる生兵ぞ、
疾く陣營をたてなほし、
晴の軍に備へせよ、
さらば。』と太き黒金の
十束の鞭をふりかざし、
一の鼓をはたと打てば、
爪長駒音を負ひて、

龍の宮居にかけおりぬ。
二たび打つは二の鼓、
こだま擁きて雷の鳥、
科戸の國に飛び去りぬ。
残る七つを一時に、
とどろと打てば、大地震の
揺るゝが如き物あらび、
空は響きの身ごもりの
いたき痛みに堪へずして、
息切しつゝ身もだえぬ。

「世に手強なる誰ありや、
野槌河郎天のざこ、
鬼も小鬼も禍神も、
皆悉くつどひ来て、
わが手力に觸れずや。」と、
闇を蹴たてゝあまたゝび、
天の街を駆けながら、
手馴の弓の馳引に、
ひかめさわたる電の

矢は、神無月並び田の
稲田の面に群がへる
阜蝻の如く飛びちれば、
あなや、「真闇」の長すがた、
立處もゆらによろめきて、
烏黒なるくらやみの
吐乳もすると見る程に、
射ずくめられし大風は、
深手にひるむ鴉鳥、
波の穂がしら高すなど、

星斑なる血に染めて、
縹羽たゆげに塞ぎつゝ、
礮山かけに逃ぐる如、
眞廣げ姿くづをれて、
故里とほく落ちゆけば、
負腹だちし海神の
額は白髪の大童、
血戯しつゝ立ちあがり、
怒り眼に睨みしが、
つと腹向に覆へり、

そゝぎも荒く倒るゝや、
海は乳母のをさな兒を、
抱くかの様に手をのべて、
づぶと浪間に引きいれぬ。
かくとし見つる日の神は、
喜びあまの相鎗か、
夕立雨を投げながら、
寄手の霧を追ひのけて、
また現はるゝ車の上、
玉の面のほゝゑみに、

聞はさながら明らめば、
折こそあれや女樂、
雲路はるかに鳴りどよみ、
天の御蔭のさざはしに、
さらびやかなる玉衣の
天人八人したがへて、
眞夏の女神筒姫の
時盛りなる出ましや、
反わた殿の行ずりに、
散華路にひるがへり、

系かくは虹の光の環、
代は安らかに治されど、
なほ戦闘にあき足らず、
われは嵐を追撃に、
青葉ぬれたる山こえて、
雲居の端にとどろきぬ。

三

天そゝり立つ高山の
険しき嶺に宮居して、

冬しろしめす白姫は、
ふと聞馴れぬ耳鳴に、
清き眉根をひそめしが、
今眞玉振る御聲に、
『かなた辰巳の空の上、
夏ならざるに雷狼の
はためき鳴るぞ訝しき、
覚えある子は駆けゆきて、
事の様をば伺へ。』と、
令旨はがらにありければ、

『畏まりぬ』と同音に、
笑しらす雪はた霞
小躍しつゝ立ちあがり、
曳くは北氣の尾白馬、
粗き馬氈に跨がりて、
天の街をひた駈に、
鼓の音にしよびより
さと引きあくる雲の門、
見れば赤熊毛の霹靂神、
左手は脇の九つの

軍鼓を打鳴し、

右手には長き電の

矢束高くふりかざし、

毛牖あらはに踏みあげて、

神樂舞する物ぐるひ。

『こは寐おびれの狼籍ぞ、

術こそあれ。』と勝鬨に、

つと亂れ入る逞兵の

つららの投矢投鎗や、

氷雨吹き散る爆弾に、

寐ほけの夢はやぶられて、

脊さむけだつ霹靂神、

雨の手首のかぢかみに、

矢柄はららに取り落し、

『あな浅ましな夢かとよ、

誰が構へたる非興ぞ。』と、

宵まどひする童子の

寐おびれ様に俯伏して、

ふたゝび寒き長冬の

夢に隠るゝ寐相かな。

寄手は様を見はてぬと、
事なし顔の陣拂ひ、
雲の扉をひき閉ぢて、
白金なせる削氷に、
扉の隙を塗りつぶし、
風を逆さに乗り替へて、
跑踏するも誇りかに、
天路とどろと歸り來て、
宮居の門にかしこまり、

事の仔細をきこゆれば、
笑を湛へし白姫は、
若音きよらに、「例ながら
あな勇ましの振舞や、
越の白山立山は、
わが本宮の二柱、
そゝる背長は九千尺、
夏もみ雪の牧あれば、
北吹く風の尾白馬、
瘡だに見えず飼ふべけれ。

こは勳功の賞典ぞ、
疾く入峰して守れよ。』と、
やをら白衣の裾ひきて、
大殿ごもりありければ、
『君の恩をいたゞきて、
さらば御暇さふらへ。』と、
美しら雪はた散、
相乗る雲の走り舟、
牧に林に湖に、
越ゆればやがて筑摩なる

桔梗が原を俯伏に、
見おろす空の遠乗よ。
珠洲が岬を右にして、
七尾へかへる舟人は、
飛弾の境に近よする
雲の旗手を仰ぎ見て、
今宵も雪か山越の
子はあらずやと惑ひては、
帆綱解く手もたゆむらむ。

冬の日とみに暮れゆけば、
大野に立てる夜の神の
黒き裳裾を脱ぎ捨て、
天を、り立つ二柱、
越の白山、立山の
麓に伏せる國々は、
夜すがら絶えぬ雪降に、
髪しらむまで老ほけて、
夢まぼろしも思ほへず、
事なげにこそ眠りけれ。

(三十六年四月)

金剛山の歌

夜は長かりき、『くらやみの
黒き幕はたぐられぬ、
時こそ來れ、めざめよ。』と、
唳聲たかきどよもしに、
千歳の夢はやぶられて、

身は寝くたれの長姿、
大童なる額にして、

あかつき空にめざむれば、
あなや身側に吹きよせて、

息まき荒き羽ばたきに、
木立をふるひ草を薙ぎ、

空門とゝるに岩を揺る
天の荒し男志奈都彦、

『今こそ覺むれ山脈の
八百の群より撰られたる』

大山祇よ、とことはた、

榮を。』とばかり呼びすて、

さながら逸の背撓馬、

肌背たゆらに躍らせて、

南をさして飛び去りぬ。

二

薔薇色ごろも靡けたる

朝の童女はなやかに、

曙の戸をひきはづし、

天の榮をかたむけて、
注ぐや黄金、しる金の
照の亂れをもろ肩に、
やをら國見の目蔭して、
遠方の空を眺むれば、
天そゝり立つ大峰や、
また峰中の山ぞひに、
風は疾渡り駆けめぐり、
玉置山のかなたより、
さと身隠れて真下りに、

吹きおろすらむ熊野浦。
浪の音ゆるき朝なぎに、
真帆真廣げにひき張りて、
鳥羽路へわたる舟人は、
山いたゞきの空みだれ、
雲のちぎれを見やるにも、
上帆をあげよ、山嵐
吹きこそ來れ。』と高らかに、
板子に立ちて騒ぐらむ。

東、鷹、鞭、高見山、

北は葛城、生駒らの

右左なる山なみは、

いつを日待の名こそあれ、

夜中ごゝちの事よげさ、

夢ふかけなるこの朝け、

誰ぞや麓にけはひして、

直走りする沓の音、

そやみ吉野の水ならぬ

誰が子目敏のふるまひぞ。

あゝ高天の大み蔭、

笑聲どよむ天人の

美き歡喜のしたゝりが、

夜な夜な峰に雨ふりて、

岩根けはしき谿間より、

落ちつどひてや、白金の

真澄の色、吉野川、

汝も時世の先達の

つとめを分つ友となれ。

あな額白のわが友が、
ひた走り入る湊江よ、
朝潮はやく打よせて、
浪の音どよむ紀伊の海。
思ひ出れば天地の
ふた別れせし當時や、
長すぐれたる山祇の
心驕りに睦まじと、

四

龍の宮女を携へて、
青うな原におりゆきし、
大海神よ、とこととはに、
座あらしひの企みに、
胸のゆらぎの隙をなみ、
槽尾たけ髪蘆の花、
風のあらびにそゝけては、
さすがに老の見えもすれ、
胸乳いまはた張高に、
肩をあげては憤り、

また面構へくづをれて、
高笑する若やぎや、
なほ新代の一の座の
生挑には堪ふべけれ。

五

わが蹠の近ほとり、
やまと國原ところ狭に、
世を営める人やから、
時のわらびの高浪に、

法も掛想も學藝も、
皆がら龜をこぼたれて、
よるべ無き身の今ながら、
ひと夜高根の風越に、
巢を失ひし鳶の鳥、
朝羽たゆげに幾度か、
古枝の空をゆきかへり、
はては峰越に遠山の
山ふところに飛び去りて、
また鳥峙ゆふ雄心の

えは頹ほれぬ勢や、
檻褸素脚の様にして、
荒野の路にかけめぐり、
胸座はたと敲きつゝ、
『美しきもの甦へれ、
汝が世ふさへる高座の
礎こゝにおかれぬ。』と、
空どよもしの聲ひびき、
げにいぢらしき人の子の
猛く尊きすがたかな。

六

この曙にめざめたる
吾世の幸のたぐひなさ、
八千歳ながき來し方の
古装束を脱ぎすべし、
智慧と力に足ひたる
生命を繼がむ日よ、——この日、
法起菩薩と明王は、
頽廢堂をたちいで、

木原した路真くだりに、
麓の小野へ駈けおりて、
川邊づたひに磯濱の
波打際に去れよ、また
一言主は唯ひとり、
乾跡も見えぬ山峽の
懸路の亂れ、藤かづら、
躓きがちに行きすぎて、
朝暗ながき葛城の
古屋の洞にかへりゆけ。

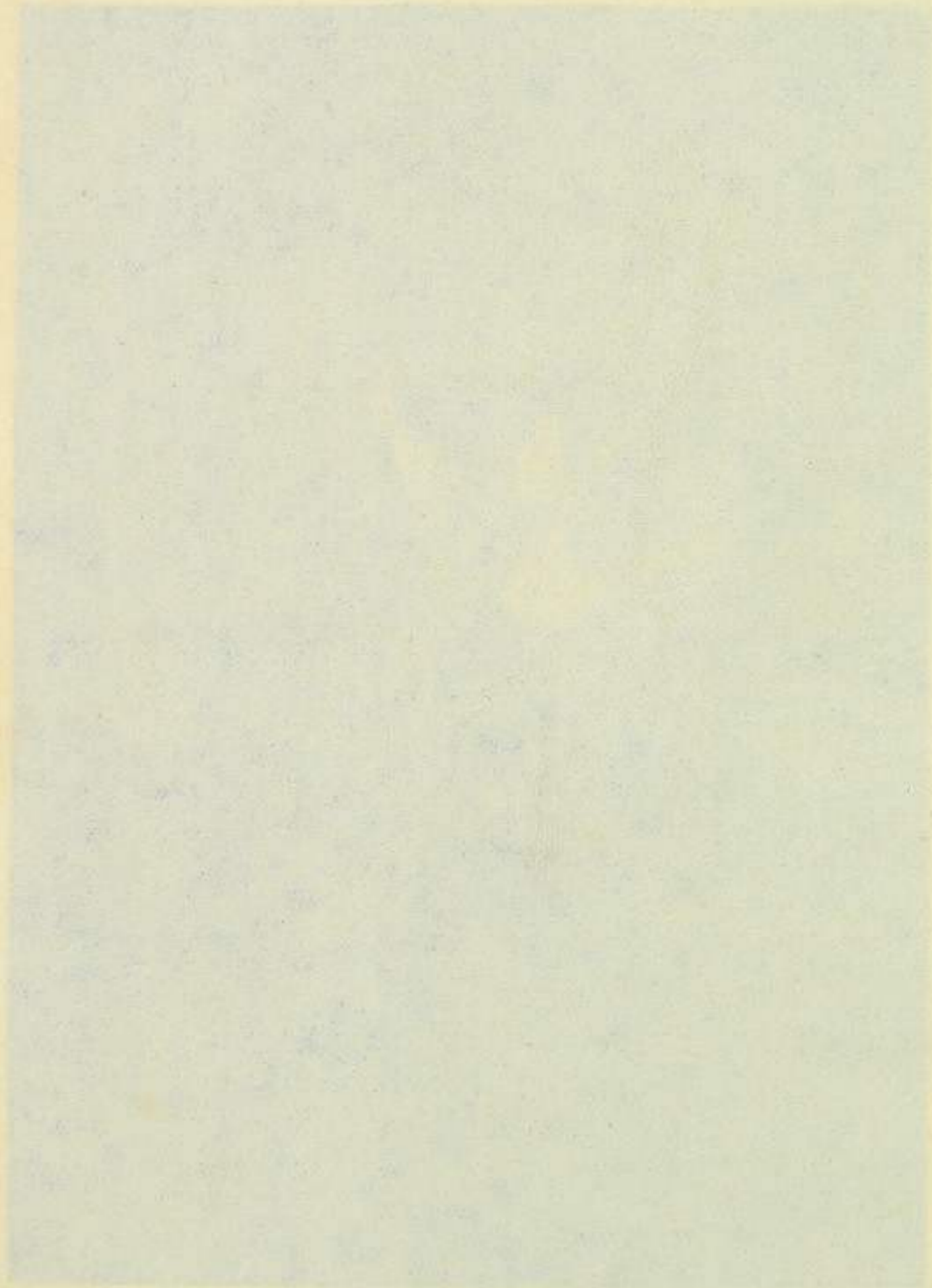
われは明けぬる二の國の
光の海に身はぬれて、
天の柱とそゝり立ち、
行きまどふらむ子の爲に、
朝日子高くさし示し、
人よ、かなたに、新代の
不壞の耀き、——無量光
玉の顔ばせ現はれぬ、
汝が乗物の轅をば、
そこにと許り教へばや。

七

ひねもす空の八衢に、
すべる車の煌の輪の
清きどよみを聞きながら、
吹息する夜は神秘の氣、
虹のごとくに花やぎて、
展くや、こゝに大天の
さかえ溢るゝ藐姑の山、
高き清きにあくがれて、

八

『いであ』の國に遊ぶ子ぞ、
正目にかゝる常世への
かゝる奇靈も仰ぎえて、
生身さながら白金の
御座にすがる酔あらむ。
あゝわが丈よ五千尺、
脚は下なる野を踏みて、
頭は高く雲に入る、――



そのかみ闇のとろゝぎの
二に別れたる初めより、
山と聳ゆる大悦を、
自然よ、君に捧ぐると、
今歳この春若やぎて、
どよみわたりぬ金剛山。

(三十六年三月)



そのかみは雲のしるし
二に雲はたる城のよう
龍と雲ゆる大空を
自然と雲に集まる
今更なる春若やさ
まよみわたりは金剛山

三十一日

天馳使の歌

なかだえ

尋ねいでたる伊弉册の
「待ちね」とありし約言に、
黄泉大門の外がまへ、
烏黒なるくらやみの
醸のふかみに立ち待てる
妻覓狂の伊弉諾は、

長立ながき黒金の
柱づたひにおろし來る
夜深の冷におどろきて、
御衣の袖をかきあはせ、
『女神はありや常闇の
長きに今は待ちわびぬ、
黄泉の戸なればえぞ分かぬ、
わが國原の夜半ならば、
昂星はすでに七階の
天路の旅は經ぬべきを、

長ものがたり程こそあれ、
黄泉門の外のおかるみに、
汝が生肌のきよらさを、
見ばやとのみにあくがる、
神の心は知らじか。』と、
『汝妹』と高く呼びはなち、
聞耳たて、伺へば、
あなや真洞の空鳴に、
『汝妹』と低くこだまして、
また立ちかへる鎮まりに、

『さては仇なる約言や、
黄泉戸喫の名こそあれ、
戀の力のひとすぢに、
絶ち難からむ何ありや、
黄泉門の守にあらそひて、
また現し世にかへらめと、
ありしは浅きたばかりか、
術こそあれ』と獨りそぢ、
やをら黄泉門に忍び入り、
常夜の闇の手さぐりに、

弓丈八十路を過ぎくれば、
狭霧ゆらゝに漂ひて、
人香かすけきほのめきや、
故こそあれと男の神は、
左みづらに刺しませる
湯津の瓜櫛男柱の
一齒に鑽りし忍び火に、
のとくらやみを見入るれば、
黒金透戸いからしく、
鎖しかためたる洞穴の

石床くらしき平伏しに、
衣脱ぎすべし髪を解き、
脹れ爛れたる背に肩に、
蟲とろゝける女身を、
齋き顔なる雷の
群よ、赤熊毛の童形、
大雷は髮際に、
火の雷は胸ぐらに、
黒雷は鳩尾に、
裂雷は臍下に、

臂には土の雷と、
若雷と立ちならび、
脛には伏せる雷と、
鳴雷とあぐみゐて、
手がらみ解かず俯伏に、
溜息低くわななける、
これや生肌つやゝかに、
くる髪ながく匂ひけむ、
ありし女神の死身かと、
見懲りはてつる戀ざめに、

湯津の瓜櫛とりおとし、
ぬき脚しつゝ後しざる
御沓の音を片耳に、
つと身を伸し、伊弉册は、
「忍びあるきよ、君ならぬ、
こゝに誰が子の差脚ぞ、
黄泉とほくもたどりしは、
生挑みなるたはむれか。
死の唇にそゝぎては、
よみがへすべき戀水は、

掌ふかく掬みながら、
雫もとめず覆したる
疑の手のわななきや、
あゝ「待たしめよ、待ちがてに、
彼を黄泉門に誘ひて、
汝が死肌を試みよ、
許されか、はた永久の
とらはれ人か、いづれ。」との
神の御言はさだまりぬ。
あはれ今こそ、伊弉册の

胸の火黒く燃えあがれ、
 誰ぞ追討に逃足の
 信實ものを捕へよ。』と、
 嗚聲たかく罵れば、
 『お』とくらやみに答して、
 八つ雷のおもひもの、
 綽名嫉妬と呼ばれたる、
 よみの醜女の八人らが、
 烏羽色の蠱ごるも、
 裾もほろゝに駈けいでて、

圍み撃する手ばやさな、
 身をかへしたる伊弉諾は、
 黒實かづらを脱ぎすて、
 投げれば蒲子はらゝかに、
 醜女八人が手もおかず、
 ひろひ食む間をつとぬけて、
 黄泉門の外にかけくれば、
 追鳥狩の風ながれ、
 風間を待ちて直路に、
 追羽うちつゝ逃鳥の

遠出にせまる隼か、
またいきほへる醜女らの
足音まぢかにはためきて、
かい擴げたる手先の
後髪にも觸るゝやと、
見れば反身の腹むきに、
道逸しつゝ伊弉諾は、
ほぐれし右のみづらなる
湯津の爪櫛ひきかぎて、
捨つればかはる筈や、

醜女八人が手だまりに、
ぬき食むひまを逃のびぬ。
追手が様のもどかしと、
透戸がくれの垣間見に、
足ずりもがく伊弉册は、
あなや蔀をへし折りて、
半ば開きし透間より、
身を側めつゝくゞりいで、
八雷をさしまねき、
頃は霜月こがらしの

木々の落葉を吹きまきて、
谿のはざまに入る如く、
道もとゞろに息まきて、
ものものしやと追ひすがる。
されば命は御佩の
十拳の劍ぬきはなち、
しりへの方に振りながら、
黄泉比良阪岩はさま、
關の懸路にたどりつき、
たとへば五月さみだれの

晴のひと日よ、河守が
水量まさりにおどろきて、
枝河口の水門なる
樋の戸手ばやに傾す如く、
はざまも狭にそゝりたる
千曳の岩をゆりおこし、
しかと阪根を支ふれば、
進みかねたる伊弉册は、
岩かどごしに靡ぎ、
『さのみ逃脚すみやかに、

わが手先を逸れぬとも、
天なる父のあざけりを、
聞きのがるべき汝が身かは。
あゝ生戀のへるへる矢、
おほみ心の試みに、
黄泉門一重をえは貫かで、
われと胸乳を傷つけし、
射手のてだれの譽れさや、
そのおどろきに弱げさの
『幸』は矢目よりすべりいで、

汝が魂の盗み食み、
甘らと『憂』が忍びしを、
事よげさなる面や。』とて、
あざ笑ひつゝ罵れば、
『誰ぞ真おもてに、わが戀を
試みらると言ひ張らむ、
其奴さこそは伊弉諾の
劍を怖ぢぬ猛者たらめ。
さきに汝のうらわかき
肌のぬくみに咲きそめて、

今は黄泉の石床の
冷にしほみし戀の花
咲くにしほむに試みの
殊更めきし何の名ぞ。
汝が死肌に添臥して、
息ざしからき接吻に、
生命の水を干さんには、
なほ『憂』もこそまさらめ。』と、
反鞘うちし高ふりに、
『いかに、八十度汝が戀を、

試みらると呼はんに、
何を弱みのたゆたひぞ。
その口清に賣られたる
わが生恥の、死恥の
むくぬよ、あはれ燃えさかり、
日々に汝が子の千人をば、
牲に。』とあれば、『よかんめれ、
さらば顔よき妻をよびて、
日々に千人と五百人を、
産まんが、いかに、其日まで、

汝が季の子を斬りすてし
劍は鞘に女神よ。』と、
いはせもはてずおる聲に、
『あなや、迦具土死りしか、
黄泉の真洞の夢まくら、
なげきを吾子の聲かとは、
母は僻耳さかざりき、
あな哀れや。』と伏しまるび、
やまと國原流れ江の
水音の笑も聞馴に、

咽びの色にどよむまで、
歎歎もよよと嘆きしが、
『天なる神も見そなはせ、
失はれつる迦具土の
仇はかくぞ。』と立ちあがり、
つと駈けよりに比良阪の
かための岩を跳ねのけし、
その手力のすさまじや。
八雷と醜女らを、
手まねきしつゝ追ひすがる

面魂の荒ましに、
怖氣だちたる伊弉諾は、
透山かけの篠原に、
獵りいだされし鹿の子の
足音のみだれはらゝかに、
落ちゆく方よ、丹後なる
速石の里の久志の濱、
遠目に青き浪の花、
まきては開く興謝の海、
磯回にちかくそゝりたる

天の玉橋、たからかに、
半らは雲にかくろひて、
白光する欄干の
ながめに心をどりては、
脚は空なるいきほひの
駈よ、勇みよ、ましぐらに、
橋のたもとに走りより、
身をすくむよと見る程に、
つと梯子に跳ねあがり、
手ばやに柱たぐりつゝ、

中空たかく攀ぢのぼり、
目蔭をさして見おるせば、
わはれ伊弉册すさまじき
黄泉の女神橋立に、
よぢては滑り伏しまるび、
また立ち上り絶れども、
のぼらむ術もあらなくに、
「知らずや女神すべらかに
汝が手の橋に堪へざるは、
しる金なせる欄干の

手ざはり圓きゆゑならで、
黄泉の真洞にふさひたる
醜女を天の八十蔭の
をとめに恥るおもひぞ。」と、
語りのこして脚ばやに、
ふむや沓音とゝるかに、
橋詰ぢかう攀ぢし頃、
見よ白眼なる伊弉册の
みづらは活きて蛇となり、
鎌首たかく諸むきに、

舌打しつゝ火を吹きて、
つと大空をふりあふぎ、
抱くは太き橋柱、
思ひ入りたる手方に、
をめきをらびて搖ぶれば、
八雷と醜女らは、
空手たゝきて同音に、
『今こそ神のたくらみと、
小箕にふるふ糶がらの
いづれ重きを見るべけれ。』

罪よ、嫉妬よ、疾くよせて
死の大母に加勢せよ、
よるづの價値と支配とを、
高み座より奪ひきて、
物みづからにかへらしめ、
憤れる神の壓口の
幅試みむ日こそ來れ、
見よ、橋柱かたむきぬ、
折れぬ落ちぬ。』と呼ぶ程に、
天の玉橋なか折れて、

あなや、地鳴の壘より、
光は背に洩るゝやと、
常夜の守のまどふまで、
根はすさまじきどよめきに、
倒れかゝりし與謝の海。
海はをのゝき、高這ひて、
潮泡あらくしぶきあげ、
沖べはるかに逃れしが、
また立ちかへり爪だちて、
高胸さわぎ押へつゝ、

橋脚ぢかく忍びより、
はては甘らに、安らかに、
胸乳に抱き、手にまきて、
さゝやき交す形すがた。
事のあらびの烈しさに、
怖氣だちたる逃脚や、
女神のかざす手招きに、
「あゝ、天の橋こぼたれて、
現し人の世、とこしへに、
黄泉の戸にこそ近うなれ、

忘れがたみの愛子らに、
心残りのあらじかや、
真情ものなる伊弉諾。』と
勝鬨たてゝ引きあぐる
黄泉の軍をのぞみつゝ、
命はかなた、橋詰の
男柱に身をよせて、
そよ、そのかみや大神の
み言かしこき御召に、
女神をひきて御殿の

み階のもとにひれ伏せば、
『おはれ吾子よ、汝らの
利心つとに知ることく、
とはに動きて撓まざる
わが魂の手力は、
とろゝき揺るゝくらやみに、
國あたらしう築きしが、
まだ浮きてのみ漂よへば、
今よりおりて凝りかため、
汝が子を産みて常久に、

天つ榮を布くとせよ、
青海原をさぐるべき
天の瓊矛はこれにあり、
たどりゆくべき大空の
途のとだえは斯くこそ。』と
殿もゆるぐ銀輪の
天つ高聲ほがらかに、
『橋立あれ』とのたまへば、
おほ空いたく身もだへて、
仰反うつと見るほどに、

闇にはかに中裂けて、
さと白光ながれつゝ、
おはれ浮橋反がたに、
欄干ながくかゝりしに、
風なぎわたる越の海、
空にたいよふ蜃氣樓、
盡かとはがり危がる
魚津の浦の蟹の如、
眼つふらに見入りたる
命ふたりのおどろきや、

その驚きもよろこびの
渦の深みにかくれつゝ、
天の瓊矛をいたゞきて、
み蔭の庭をひきさがり、
踏むや玉橋といとと、
御衣の袖をひるがへし、
ひるがへしつゝ、降りゆきし、
むかしを更に忍びては、
今の悲み堪へがてに、
聲音も低う打ちしめり、

「その玉橋もやぶられぬ、
仇はとるかに比良阪の
關をかなたへ落のびぬ、
天と地との直路こそ、
とはに絶ゆれ。」と獨りごち、
天路かへるもたどたどと、
神の殿居にいぞむきぬ。

あまくだり

—

ひと日夜ながの墨染の
幕はゆるにからげられ、
まなじり青き明星の
火採の童さき追に、
若ざかりなる曙が、
花笑すがたにこやかに、
天のみ階にたす頃、
玉の御殿の高座に、
權威あふるゝ聲ありて、
『あゝ夜はあけぬさもあれや、

魂に息する神の子に、
日も夜も何のわかちぞや、
いま來調を命ずるは、
朝政きくならで、
まめ心ある汝らに、
神ばかりする事こそあれ、
天馳使まゐれよ。』と
八十隈おちずどもすや、
『畏まりぬ』と西東、
飛行自在の大衆は、

さと旗^{はた}じるし靡^なけあげ、
伸^の羽^はうちつゝ走^はせまゐり、
天^{あめ}の八^や十^{じゅう}蔭^{かげ}とこる狭^せに、
肩^{かた}ずりながら並^なみゐれば、
御^み垣^{かき}守^{もり}する近^{この}衛^ゑらは、
廻^わ廊^{らう}ふむも誇^ほりかに、
箴^{えびら}の矢^や束^{つか}鳴^なるまでも、
鎧^{よろひ}づきしてゆきかへる。
よしと見^み給^{たま}ふ大神^{おほがみ}は、
高^{たか}み座^{くら}なる白^{しろ}がねの

光^{ひかり}のなかに立^たちあがり、
『きけよ息^{いき}より産^うれたる
枝^{えだ}神^{かみ}ながら、吾^{わが}子^こなる
天^{あま}馳^は使^{つかひ}——そのかみに、
思^{おも}ひおこせる企^{くは}や、
とはに動^{うご}きてをやみなき
わが魂^{たましひ}の手^て力^{ちから}が、
ま闇^{やみ}の淵^{ふち}に築^{きづ}きたる、
かの二^にの宮^{みや}の新^{しん}國^{くに}に、
天^{てん}の榮^{さかえ}を布^しけよとて、

任を^ま負^おせて降^{くだ}したる
みこと伊弉諾伊弉册は、
たゞよひ浮ける大海に、
黒き陸土をさぐりえて、
構へおこし、八尋殿、
こゝを組戸に臥しなれて、
産みし男の神、女の神の
その大兄は、長たかき
大事忍男、いもうとは、
やはら肌なる石巢姫、

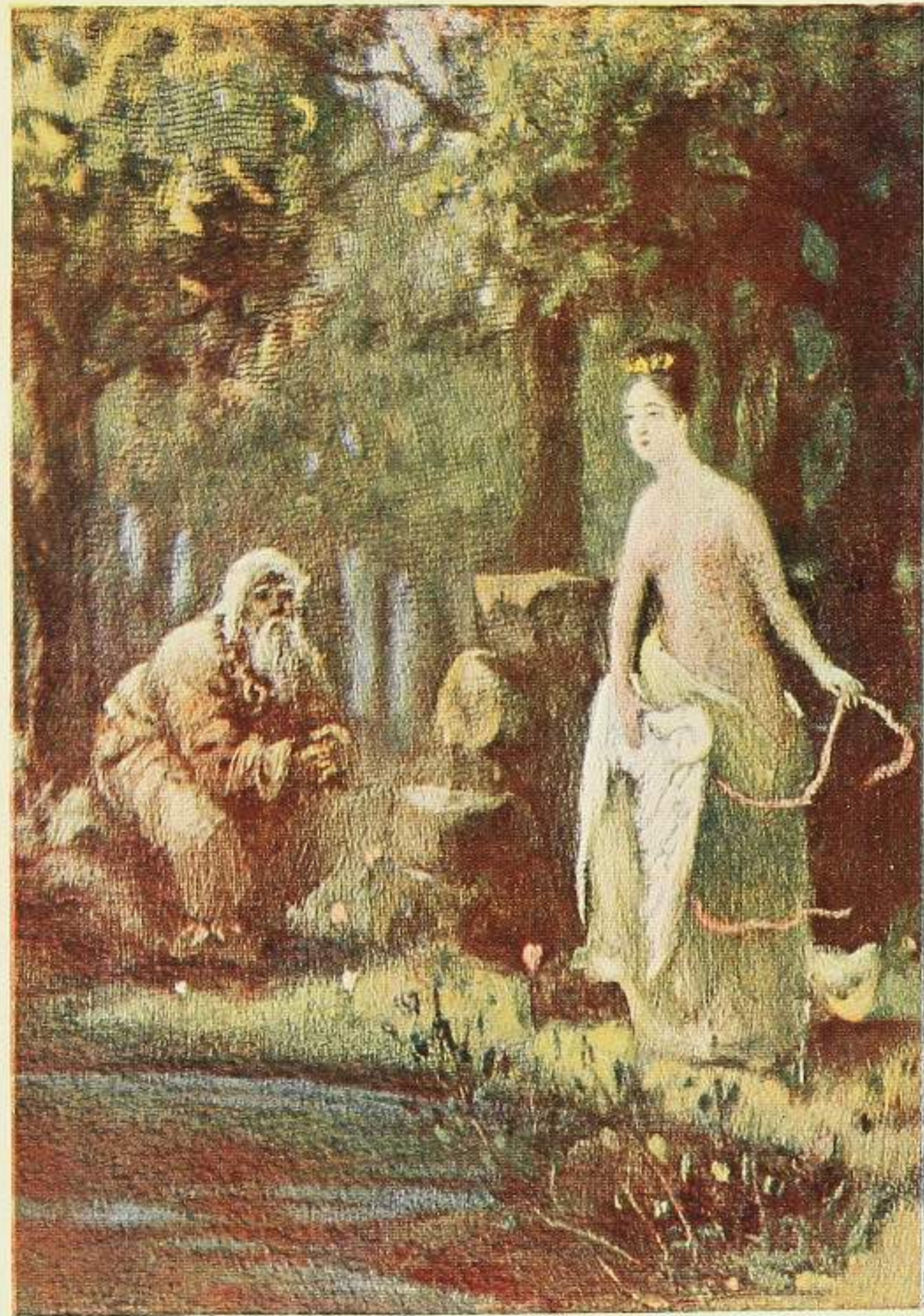
つぎは、肉むら厚肥えて、
胸張だかの海の神、
つぎは、嘆息あらかに、
髪みだれたる志那都彦、
つぎは、木の神山の神、
さては、緑の被衣きて、
花笑ふくむ萱野姫、
さてしも足らず伊弉册は、
よろづの榮のもとゐなる
天の光を奪はんと、

おほ殿ごもるわが顔を、
思ひぬすみて産みし子ぞ、
わはれ迦具土——僧越の
胸にやどりし父無し兒、
ほしいまゝなる母ゆゑに
咒はれぬべき生れ日や、
その日生命は死を孕み、
その日清きは醜きを、
善きは悪きをはごくみて、
絶えず自らなやむべき、

ふところ枝を芽ぐましめ、
その日母なる伊弉册は、
子の迦具土の息の火に、
胎のやどりを焼き焦し、
(後世さはなる産ず女の
一座や)またと孕み得で、
罪と滅びの屯なる
黄泉の真洞におちいれば、
嘆きあまりし伊弉諾は、
「母の咒ひと、繼父の」



怒りのむくい、斯れよ。』と
追へば、及むかふ迦具土の
手楯もとめず、拔撃に、
はたと肩より斬りすて、
劍は鞘にその父は、
妻兎狂の脚はやく、
黄泉の真洞のくらやみに。
子はまた仰にくつがへり、
なげきは遠くとこやみの
母の枕にどよむまで、



あはれむく心跡は
世つばなむかふ世ま七
手紙をしるす故郷に
はたと肩よる世りせ
流は船にその文は
夢に花しん眠はやく
貴族の美濃のてしやみ
字はまを仰にむつわ
なほしは遠くともやみの
眼の光にちよなまて

深手のいたみ訴へつゝ、
焔生血の血そばへに、
身をもかくよと見る程に、
斬りはなされし胸乳より、
骸はふたつに中裂けて、
左は飛びて野火となり、
萱野の姫にすがりより、
右は潜みて竈火となり、
石巢の姫にかしづきて、
あゝ常ひさに人の世の

まめやか者に呼ばるゝも、
咀はれの身はせめてもの
贖ひとこそ言ふべけれ。
黄泉に降りし男の神よ、
ひと度戀をこゝろみて、
また愛妻を得させよと、
透戸の闇のかいまみに、
蟲とろゝける伊弉册の
寐様見すれば、尻ごみて、
ぬき脚しつゝ比良阪の

關に落ちゆく戀ざめに、
女神はたへず立ち上り、
醜女雷よびつどへ、
速石の里に追ひしきて、
久志の濱べの天の橋、
攀づる踵を踏むまで、
橋のたもとに絶りしも、
あがなはれざる『罪科』の、
はたまことなき『執念』の
えは許されぬ腹だちに、

男柱あらく揺りどよめ、
天の橋立なな折りて、
再び黄泉に逃げいりぬ。
（橋のなかは倒れ伏し、
さながら海の背乾鯨、
波間に肩をうかべては、
罪あらずひの基なる
そのかみの日を忍ばしめ、
なかは高く折れ残り、
朝日夕日に照りはえて、

空のひかりの色を添へ、
また欄干の横づらを、
遠山の端にゑがきては、
虹の花環に、高天の
榮と力をにははしむ。
されば、その後災禍を
末の子どもに絶たましと、
日も夜も守を戒めて、
黄泉の大戸を固むれど、
天の通ひ路なな絶えて、

訴へ願ひのすべなさに、
伊弉諾の裔人の子ら、
ながき嘆のなからめや、
やよ高座にさぶらへる
天馳使なんぢらの
八人を撰りぬ、疾くおりて、
下なる様を見てまゐれ、
み空に黄泉にふた親の
ひとりを残す孤兒よ、
世にも幸無の宿世や。』と

玉のみ聲のたからかに、
殿に鳴りてどよもせば、
『畏まりぬ』と、高座の
み階の下にひれ伏せる
天馳づかひ、――八柱の
『信』よ、『希望』よ、『清浄』よ、
『智慧』よ、『操』よ、『忍辱』よ、
『正義』よ、『慈悲』よ、白がねの
羽衣ひろく張りあげて、
天の八十蔭まかりいで、

おほ空雲路高ゆきに、
列流しつゝ、駈けくれば、
門こそ立てれ、金銅の
八十抱なる太柱、
根は渾沌の淵に入り、
楣がゝりは目ざとなる
鷲の遠目もさゝぬまで、
矛立たかく天に伸び
しろがね張の兩扉、
開け放ちたる左右には、

見よ『勇猛』と『精進』の
衛士らふたりの大兵が、
赤熊の冠、くるがねの
鎧すがたよ、警ふれば、
西恒春の夏のくれ、
『あみす』族の裸子は、
椰子の木かげに腹這ひて、
筏こぎよる日黒みの
親の手練に見入るころ、
支那の海なる夕づく日、

爪ぐれなるに雲染めて、
おほ空たかく射す影に、
麓は闇にたちながら、
峰は照みの紅頭嶼。
「見よ、天門の影おちて、
羽含み隠すくらやみに、
かすかに搖ぐ薄あかり、
かしこぞ、命伊弉諾の
裔の住ひ。」と矛とりて、
道語りするはなむけに、

天馳づかひつきつぎに、
門を脚早にかけいでて、
飄へるよと見るほどに、
やをら伸羽を沈めつゝ、
天路をすべる流星の
はるかに遠く、また遠く、
直走りゆくすがたかな。

二
下なる國の比治の山

比治の山なる頂きに、
岩垣なして湛へたる
眞名井の水の清ければ、
ひと日は雲の若をみな、
白裳なびけて舞ひ下り、
なよび姿をうつし見て、
笑顔まろらに山祇の
大殿さして往きすぎぬ。
ひと日は風の童がた、
螺髪みだれて駆け上り、

咽のうるほひ飽き足りて、
また落葉樹の村立に、
勢あらく飛び去りぬ。
今日また山の頂きに
あま降り來し八柱の
神の使よ旅やつれ、
垢膩をすゝぐと岩が根に、
白がね衣脱ぎすべし、
鹿の子の如く小躍りに、
眞名井の縁におりたてば、

水は身柄のおもふせに、
踵のかげにかくれしが、
眞玉和手にむすばれて、
髪のかゝりば匂やかに、
肉むら白き撫肩や
まろき垂乳のふくらみに、
はらゝぎ轉ぶ玉みだれ、
水の面にこぼれては、
香ひ油ととろけつゝ、
水際の草にしぶきては、

星斑なるかゝやきや、
花こそ咲けと見る程に、
誰ぞいかなる戯れぞ、
木鼠鳥もかよひ來ぬ
山頂のこゝにして、
衣脱ぎすてし岩垣に、
爪立ながらうかゞふは、
さては人氣と目ざとなる
眞名井の水の目くばせに、
さと面がはるをとめらは、

『ものこそ近ちかに窺うかがへ』と、
立つや頻しばしば吹ふもはらゝかに、
天あまつ羽衣はごろもひきかつぎ、
さながら海うみの旅人たびびとが、
伊豆いづの沖おきなる朝風あさなまに、
遠とほながめする鳥柱とりばしら、
中空なかぞらたかう駈かけのぼり、
勢せいぞろひして數かずふれば、
あやしや、群むれは七人ななたりの
『誰たぞ失うしなひし一人ひとりは』と、

たか胸騒むなさわぎ押おへつゝ、
目蔭まかげをさして見みかへれば、
あなや、乙姫おとひめ『慈悲じひ』ひとり、
羽袖はそでもさゝず真裸まはだかに、
眞名井まなぬいの縁ゆかりにゆきかへり、
また幾いくたびか額ぬかづくを、
岩垣いはがきをしにうかいひて、
したり顔がほなる翁おきなさび、
なほ兎ともすれば逃脚にげあしの、
『渠かれは誰たが子こぞ、下したの世よに

いづれは憎きねぢけ人、
見よ、たばさむは乙姫の
羽衣ならぬ何ものぞ、
眞名井の水に浴ぶるまに、
盗みけらしや、疾くゆきて
御座へこそ。」と天をとめ、
譬へば、春はきさらぎの
津輕の海の望潮や、
渦潮たかく鳴るころに、
外が濱べをかへる雁

伸羽つらねて引鳥の
頭あがりに細りつゝ、
渡島の空へわたる如、
上り羽うちて高ゆくや、
眞名井に残る乙姫の
遠目にしろき羽ころも、
雲がくれつゝ、光りつゝ、
さては消えぬと見入る頃、
あな、天門のかなたには、
今かへり來し七柱

衛士ら二人が驚きの
眼つぶらに見はるまで、
打あらしげし羽叩きも、
旗なびけたる天軍の
門迎へする勝どきに、
張臂脆くくづをれて、
み階のもとに倒れ伏し、
涙がちなる村聲に、
事の仔細をきこゆれば、
天の御蔭の太柱、

こだまに高くどよみつゝ、
御帳のうちに聲ありて、
『雲路はるかに往きかひし
天駟づかひ七人に、
たぐひ稀なるほなれあれ。
あゝ天の橋絶えてより、
自ら世をば營みし
伊弉諾の裔——人の子ら、
神に属する徳性の
いづれを久に缺さしやと、

心構へのこゝろみに、
 和奈佐翁よ、乙姫の
 『慈悲』の羽袖を抽けりとは、
 いじくも物を撰びたれ、
 かくてそのかみ伊弉册が、
 子の迦具土の息の火に、
 焦しはてたる永遠の
 女性は遂に招かれて、
 (さても譽れの囚人や)、
 また人の世にかへり來ぬ。

その乙姫の胸乳より
 日も夜も絶えず滴らむ、
 慈悲よ、泉に湛へては、
 汀をあらひ野をひたし、
 木の根草葉のうるほひに、
 小川となりて流れゆき、
 空の廣みに浮びては、
 風の伸羽にまたがりて、
 山には青き靡葉を、
 少女の如く笑はしめ、

海には白き浪の穂を、
積の如く躍らしめ、
人の心にかくれては、
見聞知るべき現象の
よろづに吾を、さてはまた
よろづを吾に往きかへり、
黄泉にくんだり、天に攀ぢ、
父と母とを呼びさまし、
かの『過去』と『未来』の
假さだめなる名を絶えて、

大なる『現在』の『新代』に、
甦へりたる民として、
榮と力に足ひたる
歡喜の日に濡れしめよ。
そのむくいには、『永遠』の
『女性』をひとり汝が名にて、
黄泉の軍をしたがへて、
天なる宮の煌星の
うてなに歸る『人の子』の
勝ぞ、其名に許すべき。

あはれ天人、人の世の
根ざしは斯て据えられぬ、
また新なるたくらみに、
まめ心ある汝らの
才と力を籍らんまで、
往けよ、守りの務めに。」と
令旨ほがらにありければ、
『あはれ畏き御言葉や、
君は千代ませ、千代ませ。』と
推しつどひたる天軍の

諸聲たかく張りあげて、
勝鬨呼ばふどよもしに、
空は高脛よるめきて、
折れ残りたる橋立の
柱がくれに取りすがり、
身ふるひしつゝ、蹙れば、
見よ、下の世のかなたには、
和奈佐翁の瘦法師、
膽つぶれたる驚きに、
天つ羽衣とりおとし、

眞名井のふちに身を伏して、
上目に姫をぬすみつゝ、
忍びにひひと泣き入りぬ。

(三十六年十一月)

おもひで

春の夜はしづかに更けぬ、
はゆま路の並木のけぶり、

箱馬車は轍をどりて、
宮津より由良へ急ぎぬ。

朧夜の窓のあかりに、
京むすめ、難波商人、
朽尼や切戸まうでや、
人の世の旅の道づれ。

物がたり吹吐まじりに、
眠り目のとろむとすれば、

誰が子にか、後のかたに
をりからの追分ぶしや。

清らなる聲ひとしきり、
谿あひのさゝら水なみ、
咽び音に響きわたれば、
乗合はなみだこぼれぬ。

月落ちて闇の夜ぶかに、
箱馬車は由良へとゞきぬ。

客人は車をおりて、
西東みちに別れぬ。

その後やいく春経けむ、
おほ方は夢にうつゝに、
忍びてはえこそ忘れぬ、
由良の夜の追わけ上手。

その子今何處にあらむ、
思ひ出の清きかたみや、

人々のこゝろに生きて。
とことほに姿ぞわかき。

(三十六年二月)

おもかげ

花薔薇咲くなるかげに、
蜘蛛の子の日向ぼこりや、
花びらのこぼるゝ日なか、
はかなさの夢こそさむれ。

現し世のをはりのゆふべ、
死の黒羽こそろとおちよ、
おもかげの夢さながらに、
むねの君あまつみ國へ。

をろの鏡

夕ぐれの小霧のまぎれ、
やま鳥はけはひ静かに、

野がへりの翼おろしぬ、
やまの井の井手の禿木。

水の面のますみの色に、
やま鳥のをろの鏡や、
くづをれの少女が胸に、
そのかみの夢のたゞよひ
眞廣げの退羽たゆげに、
やま鳥は森にかくれぬ。

夢ざめしうつゝの心地、
山の井のふかき吐息や。
夜の幕ゆらゝに落つる
夕闇の醸みのふかみに、
山の井は斧の柄のくつ
束の間を初めて知んぬ。

(三十六年十二月)

戀ごゝろ

草くさにならばや、

葵あひのくさに、

卯う月づきなかばの酉とりの日ひや、

加か茂もの御み生おれの片かたかづら、

君きみの御み髪かみにかざされて、

一ひと日ひを榮はえに枯かれたさに、

草くさにならばや、

あふひの草くさに。

花はなにならばや、

堇すみれの花はなに、

垣かきね芝しば生かのあさじゆり、

息いきざし深ふかき濃こむらさき、

きみがあゆみの躑あやうらに、

やをら踏ふまれて死しにたさに、

花はなにならばや、

すみれの花はなに。

鳥にならばや、

鷓鴣の鳥に、

山頰白鳴かぬ日も、

枯野の木原くゞりきて、

園生の芭のかたかけに、

君の御聲を聞きたさに、

鳥にならばや、

さゝぎの鳥に。

水にならばや、

岩井の水に、

夏かけ深く湧きあふれ、

一日日盛りうるほひに、

やはら手圓う掬ばれて、

君のみ口に觸れたさに、

水にならばや、

岩井の水に。

貝にならばや、

子安の貝に、

鶺鴒の羽昔屋の通ひ路に、
龍の宮女にはぐれ来て、
濡身を君のましら手に、
御肌の幸を守りたさに、
貝にならばや、
子安の貝に。

蟲にならばや、
竈馬の蟲に、
あり明月夜さし洩るゝ、

さむき厨のいそしみや、
君がなよびの朝すがた、
慰めぐさに鳴きたさに、
蟲にならばや、
いとゞの蟲に。

玉にならばや、
眞珠の玉に、
煌の身きみが紅さしの
指にかゝやく許されか、

さては遠海のみなぞこに、
吾世沈みて朽ちたさに、

玉にならばや、
眞珠の玉に。

たのむ願ひは、

後世の誓ひ、

わが身七度うまれえて、
七度わが世撰らるとも、
えやは變らめ戀こゝる、

君に捧げてありたさに、

たのむ願ひは、

後世のちかひ。

後の逢瀬は、

さもあらばあれ、

相見がたかる現し世に、

男をみなの人となり、

かたみに深く慕ひよる、

今のえにしを思ひては、

後の逢瀬は、
さもあらばあれ。

戀のわな

あけぼの破るゝ光にながれ、
然りやな、

君にまといひて、
面照はなにほてるまで、
さりやな、

戀のたはむれ、
さりやな。

日なか小百合の夢にかくれ、

さりやな、

君に折られて、

息のかをりに咽ぶまで、

さりやな、

さても口づけ、

さりやな。

夜ぶか夜殿の夢路にひそみ、

さりやな、

をぐな姿や、

君と花野のめぐりあひ、

さりやな、

胸もゆらゝに、

さりやな。

はては黄泉門の真闇にしのみ、

さりやな、

君を待ちえて、

諸手やはらにかき擁き、

さりやな、

ながき眠に、

さりやな。

貧しき浦里にして

霜月ずゑのさびしさ、

日も夕ばえぬ浦まや、
かなた洲崎のはづれに、
夕づゝ低うかゝりぬ。

苦屋がへりの蟹が子、
ほくそ笑する今宵か、
葦原がくれそよろと、
いさり小舟の滑りや。

巽風のさやぎ和らに

河原よもぎに掠れて、
渚づたひに消ぬれば、
闇こそ落つれゆらゝに。

かゝる夕僧尼らは、
沈黙ふかけの雲居に、
さくや足の音天つ女の
そゝろ歩きゆるらかに。

かゝる夕盲人らは、

微笑み泣くや忍びに、
心の闇の八衢——
慈悲の御影見るにこそ。

思へ浦女のゆふぐれ、
刺網干さん玄ばしも、
おほみ力にほひては、
和魂かくぞ酔ひぬる。

わが世の寶愛身の

心よわきへりくだり、
今宵はわきて操に、
その御力のまにまに。

(三十五年十一月)

白膠木もみぢ

神無月のつごもり、
時雨もよひの午すぎ、
乾跡も見えぬ山路に、

白膠木紅葉のこぼれや。
昨日はこず糸、今日は根、
ゆくへも知らぬ弱げさ、
寂しみふかき身ゆゑに、
大御ぢからのまにまに、
はらゝぎ行くや乾反葉。

もぐらもち

新嘗まつりほどちかき

霜ふり月の朝まだき、
乾反葉しらむ籬根に、
骸こそ見つれ、鼯鼠。

もとより闇の私生兒の、
害に隠れてあるべきを、
新墾小路うがちきて、
見しは光かやがて死か。

今はの一目くらやみの

八百日を夢になぞへしや、
さても瞬き、——大慈悲の
籠の御かけを見隠しに。

げにや死こそは波羅蜜の
岸の夜あけの初びかり、
ひかりなればど闇住の
身にしも望み、——はた恐れ。

(三十二年十一月)

霜月の一

洛東若王子路のそとるあるきに

神樂岡のかなたに、
十夜法會もをはりて、
日射よ、日ましに薄れゆけば、
殿鼠は路をとざして、
眞闇の窖にやすらひ、
燕はいく群伸羽なめて、

高原ついき南へ、
夏かげたづねて海をこえぬ。

二

野もせの小草しをれて、
都ほとりの白河女、
花箕のさびれを見るにつけて、
み冬の女神白姫、
わが世ひとりのすがれに、
御門の柱にすゝり泣くや、

高萱そよとかすれて、
時雨ぞしのびに注ぎかゝる。

三

なぐれの雨の片寄、
野路まだらの濕りに、
おち葉は乾反の歪み伸して、
濡身伏葉のみだれや、
風は素脚の寒らに、
投荷よはらゝに吹き残して、

躑あなうら躑あなうらはり荒あくも、
から山やま木こ立たちに急いそぎ去さりぬ。

四

装よそほひ衣ころもすべして、
野山のやま素す裸はだのさびしみ、——
うらびれ心こゝろ地ちに眺ながむるにも、
陸魂ちかたまふかく忍しのびて、
おほ御力みぢからの息いきざし、
不ふ壊ろなる釀かもしに醉ゑひの今いまぞ、——

わが世よ譬たとへば落葉おちばの
それさへ可あ惜た身み、弱よげながら。

五

時雨しぐれは暫しばしとだえぬ、——
鈍色にびいろあさき雲間くもまに、
ゆふ日ひのあからみ匂におひほのに、
かなた貴船きふねのあたりや、
虹にじの環花わはなにうかびて、
かざすと見みるまに聴やかて消けぬる、

さても刹那のひらめき、
見るだに涙のせきもあへぬ。

(三十六年十一月)

霜月の一夕

洛東岡崎神社の前にたゞずみて

日枝山照のあかりは、
み空の青にかへりぬ。

山なみひらさき鈍み仄に、
灰がへるやの今はを、
あな『夕暮』のたゆげさ、
しろがね被衣の狭霧ひきて、
立てるや、木原下道、
うなだれ勝なる身様はなに。

二
黄泉の真洞の空鳴
鐘ものうげの動みに、

『ゆふべ』は白みの額をあげて、
心ゆるびのくづをれ、
弱肩そゝろたゆらに、
息ざし深げのたゝずまひや、
その羽含みの醸しに、
目路みな沈黙の蕩けごゝち。

三

小風よ、羽向こそろと、
草葉がくれのさやぎに、

木原の乾反葉みだれ脚に、
ほのぐれ路をかなたへ、
さながら蠶の手練に、
魑魅よ、はらゝに逃ぐる如く、
そゝ走りゆく身輕の、
人酔はしめなるすゝる種や。

四

かなた水沼の汀に、
青鷺ひとりおりゐて、

漁^{あき}るとしもなき翁^{おきな}さびに、
物思^{ものおも}はしの目ざし、
ま菰^{こも}水草^{みづくさ}すがれて、
水面^{みづの}のさびしみ色^{いろ}をふかみ、
夢見^{ゆめみ}心地^{こころ}の見^みとれに、
さこそは歸^{かへ}さも忘れ^{わす}けらし。

五

今^{いま}し天^{あめ}なる御力^{みちから}、
なべての胸^{むね}に躍^{なご}るや、

隠^{かく}れの玉琴^{たまこと}細緒^{ほそな}ゆらに、
鳴^なるは秘密^{ひみつ}のさゝめき、
みぎはの真菰^{まこも}さびれの
一葉^{ひとば}にこもれる聖^{ひじり}とゝる、
そゝや的^{まじ}矢^やの逸^{はや}りに、
身^みにしも泌^{しみ}み入^いるきほひ見^みずや。

六

この夕暮^{ゆふぐれ}のせつなさ、
なべての物^{もの}に流^{なが}るゝ

奇靈くしひの力ちからのおほいなるに、
さこそその覺さとしり、——心こころの
妙いみじきゆらぎ見みるにしも、
内うちなる應かこひを思おもひえずば、
あゝ玉敷たましきの世よながら、
惑まどひや、いさゝか擁いだきつらめ。

(三十六年十一月)

花賣女

ひととせ小野の草苺に、
物憂がほなる白河女、
牧の小路の眞夏日ざかり、
木かげに遇ひぬ萱野姫。
やれ、やれ、やれ、やれ、
ゆくりな。

『そのかみ、鱈に剥れたる
高草の村の野兎の
素肌に被せし蒲の花銚』

われにも給べ。』と白河女。

やれ、やれ、やれな、

ねがひや。

『兎は肌のさむけさに、

蒲の花鉾得は得たれ、

小百合なでしこ花こそ残れ、

汝が故はや。』と萱野姫。

やれ、やれ、やれな、

ゆゑよし。

『さればよ、髪の花かざし、

都おほぢに白鞍の

人もぞ見ゆ。』と面照はなに、

口ごもる様や、白河女。

やれ、やれ、やれな、

恥らひ。

をとめが戀の童氣に、
笑みひろごりし胸乳より、

花は八千種はらゝに落ちて、
野もせの亂れ萱野姫。

やれやれやれな、
くれなる。

花草ひびに撰りかざし、
あさなあさなの都入り、
また白鞍の君をこそ見ね、
なりはひ得つる白河女。
やれやれやれな、

花うり。

おもかげ

額じろの
さゝら愛男、
たゆげの少女さび、
白よそほひのくづをれや、
あゝしづか夜の
星の煌路のゆき摩りがひに、

なげく吐息よ、
落葉林の小霧のなびき、
さては茅原のした露。

わが胸の
君がおもかげ、
やはらの眞玉肌、
菫かざせるなまめきや、
あゝしのび寝の
胸のゆらぎの堪へせぬなやみ、

したふ心よ、
わが世あらたの生命のきほひ、
さては常世のやすらひ。

澤瀉の歌

こもり沼の水鏡の面に、
澤瀉のひと花ぐきや、
夏の日の光にぬれて、
息ざしのけはひ深げに。

もゝとせの生命の醸し、
葉とひらき花とくゆりて、
ひと夏のこゝろ驕りや、
こもり沼の上なだら水。

やはら風そよろの渡り、
葉はゆれぬ花はこぼれぬ、
沼姫のほくそゑまひか、
さゝら波輪形の皺み。

今しこそ胸のとろ火の
もゝ絡み静かに解けぬ。
使ひ女の老女しる鷺、
眠り目の夢見すがたや。

ありやかの歸依の和魂、
あくがれの心のふかみ、
かゝる日のふと現はれて、
束のまを——また身隠るゝ。

ことうた

一、待ごころ

こよひ花野の夕づくよ、
君待ちくらす心地して、
月映あかり面はゆき
すゝる心の胸のときめき。

三歳は過ぎぬ、また更に

誰が子か待ため、當時の
夢ほのかなる甦り、
はな殻すみれ香に匂ふ世や。

二、海女

君は都のさかしら女、
磯まの小屋のおとづれに、
蟹が言葉のつたなきを、
いかなればとや問ひ給ふ。

身は海松刈る潜き女の、
浪路のそこに沈み入り、
真珠珊瑚の玉しける
龍の宮居に目馴れば、

海の秘密を洩すやと、
おほ海神のうたがひに、
をんなの才を奪はれて、
さは愚かしくなりはてぬ。

三、紅梅

雪消の岡のせゝらきや、
流れ流れてゆくすゑは、
尊菜つのごむ大澤へ。

思ひ亂るゝ人の子は、
紫野ゆき、萌野ゆき、
紅梅咲ける君が戸へ。

暮秋野徑の石に凭れて

かゝる夕や、野伏は
遠里小野のゆきくれ、
夕映ほのに紅める
豊旗雲を見るにも、
すゝる遙けき里居の
族が笑やおもひて、

旅路の憂も知るらめ。
それには似ねど吾世の
もの疑ひのわびしさ、
心なぐさの術もと、
およるや、あはれ野の石、
しろきは神の額か、
入日にぬれて映げに。

千歳を八十の年月、

静かに、ゆるに、圓らに、
石よ、汝のぬる間を、
人の子ひとり覺めて、
法よ、道よ、何くれの
臺まうけの營み、
休ひもなき姿や。
ひと日天なる高聲、
時こそ來れ、さめよと、
雲路と、ろのどよみに、
夜ながの夢はやぶれて、

みじろきそむる曙、
見るや、いかに、人の子の
小さ臺の片かけ、
くづれの石を枕に、
襤褸素脚の寝さまを。

三

形に花のきよらさ、
魂にともしのあかるみ、
さてしも人は産れて、

許されの世をたどるに、
路さまたげの何はあれ、
内なる弱み、——まどひの
さかしらがりを見るにこそ、
すぐよか心——さしもの
きはひも萎れはてぬれ

四

人さかしらの濫らに、
胸乳の冷をぬくむと、

盗まざりしや、御座の
天つ火盤の火しづく。
筆とみに咀はれて、
損ひものとなれりや、
吾世のほこり、智慧の火
燃りよ、いよよ明らに、
火かけよ、いよよ陰りぬ。
齋き、何日かは、天なる
もとの姿にかへさめ。

五

間近き麓木原の

乾反葉がくれこそろと、

春つげ鳥のあさりや、

さながら今は里居の

埴生が小屋の乙嫁、

なりはひにこそ疲るれ、

やがて白梅咲きくゆる

きさらぎ半ば涅槃會の

晝あたくかき門にして、

ほがら鳴する日あるを、
われらいつかは内なる
靈妙の醸にぬくもり、
なべての物に流るゝ
大み光も掬みえて、
いのちの火をや照さめ。

六

かなた椀樹のした路、

甕をいだきてかへる子、

をとめと吾をわかちて、
いかゞや石にかたらめ。
おはれ吾らのながらへ、
ながらへのみぞ弱げに、
はた真裸に常世の
さびしき海にゐよりて、
沈黙ふかげのたゞずみ、
わが世磯回の蘆の葉、
むかしも今もいのちの
破れやすきを知るのみ。

七

さは弱げさの身ゆゑに、
おほみ力にかへりて、
ふところ深の隠れに、
よみがへるべき人の世、
その新身をおもひて、
躍るや胸の利とゝろ。
石よみづから忘れて、
なが大母にゆだねる

歸依ぞ、——わが世の導き、
智慧の火盤の忌火や。

八

あゝ蘆鴨の水がくれ、
また浮くごとき心の
常めづらなるきほひや、
いつかは荒の人の世、
汝が名に、玉のうてなの
高らかに、はたつらゝに、

天を、り立つ日あらめ。

九

かなた、やはらの雲衣
つま紅のかくれに、
日ぞ沈み入る静けさ、
石よ、天なる御燈、
夕づつ白き燃りの
とのゐ姿やまもりて、
夢見ごゝちの聞ほれ、

わが世の富を知るべく、
貸さじや、汝が背暫しを。

(三十四年十一月)

神無月の一夜

一

夢こそさむれ、——魍魎の
忍びあるきのさやぎや、
秋雨そよるとしぐれかゝる

真夜なか時のさびしさ。
おほみ光の見とれに、
酔ひては和魂おもてぶせに、
われかの心地、かくれの
物蔭ほしげの童女さびや。

二

深山つぐみの古巢に、
孵りもあへぬ暇の
いのちの閉しに思ひうみて、

あくがれ心夜な夜な、
涙もろにも祈れど、
み霊のひかりは絶えて見じを、
こよひはいかに照しの
煌なるすがたぞ、小さながら。

三

あゝ大慈悲のみ霊に、
さゝぐる歸依の忌火や、
さびしき燃りにこゝる酔の

わが身——火採の童部、
おほみ撰にかなひて、
常世に生くやの今の若え——
夢とは、——かゝる明らの
心のあかしをいかに見まし。

四

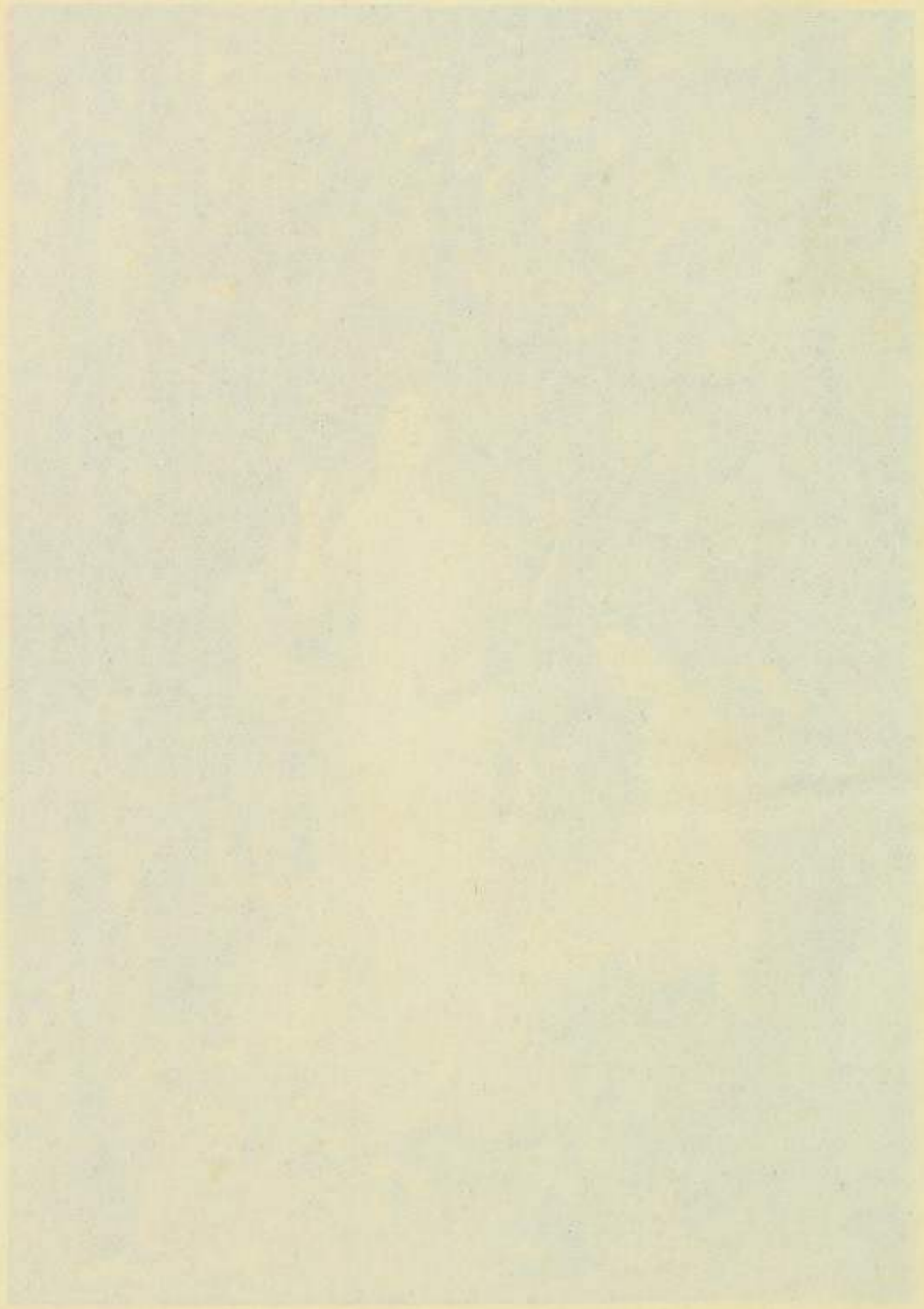
さりとも今宵おぼろの、
またの夜さやに見えずば、
寧ろや真夜なか、背黒五位の

やはら四毛よつげにまたぎて、
 岡象おかざうも眠ねむる水沼みづぬまの
 蘆原あしはらがくれに伸羽のしほうちて、
 天あめなる宮みやの御階みかたや、
 攀よぢてもふたゝび世よにはあらじ。

(三十六年十月)

神無月かみなしつきの一日

— 木の間のまぼろし —





神無月の一頁

— 木の国のまはるし —

やむをばらばらにまらさく
田舎も聞く水宿の
道すがらに神無月
天なる宮の御座や
静かともよたの世に

日は神無月つごもり、
風氣もさゝぬ陰野に、
若木の村だち、櫟ばやし、
散葉の亂れ、さながら
醜女が盪のてだれに、
いもうと、木の花咲くや姫の
若子の御靈はらゝに、
黄泉路の大戸に落つる如や。

二

渡りの鳥のひとむれ、
 伸羽なめて末廣に、
 峰越のかなたへ落の今を、
 葉もりの光陰路の
 星まだらなるあかりや、
 ほのかに狭霧の白み射して、
 ものゝ香深きくゆりに、
 酔こそいざなへ、——心ゆるび。

三

あなや上枝の絡みに、
 風かの渡りしのびに
 おこるは、かすけき女樂の
 心あがりの物の音。
 乾反葉さやぐ木の間に、
 使ひ姫七たりすがた花に、
 白よそほひのなまめき、
 浮ぶや、たゆげの霧のまぎれ。

四

小春の日和ゆるかに、
 天なる宮のきざはし、
 降り居の今かも、あまつをとめ、
 秋野の女神染姫、
 わが世の末のさびれに、
 なぐさみ物なるすゝる種か、
 否や、側見のひとり、
 掛想の人めく髪のかゝり。

五

向きこそ直れ、——緑の
 小百合葉胸にまとひて、
 よわ肩圓らのなよびすがた、
 そよ忘れずのそのかみ、
 別れし人のくづをれ、——
 弾く手も柔なる眞玉箏篋の
 しろがね音色、そよると
 さながら天路の夢のゆらぎ。

六

若音のひききたゆらに、
 揺ぶるや木々の垂り枝
 『かつては花野のすゝるゆきに、
 わが世の宵の月白、
 榮えよと笑みし吾が兄子、
 いまはた木原のめぐりあひに、
 もの嘆かしき身様の、
 した燃ふかげの心ばへや。』

七

篋篋の音、今かたゆげに、
 水波ゆらのわななき、
 『み霊のくゆりよ、大み慈悲の
 あまつ光の滴り、
 いづれは片身——睦魂、
 二の世のあけぼの、聖き宮の
 無憂樹がくれの常世に、
 ひとつに歸らむ日こそたのめ。』

八

その許されの後途、
 聖の世をばたのみに、
 路さまたげをや超えぬべき。』と、
 わなや高音の中絶に、
 しろがね衣翻して、
 花笑あえかに寄ると見れば、
 夢かの心地さながら
 木の間にさえゆく霧のまよひ。

九

あゝ北海の浪路に、
 おほ海神の手ずさみ、
 潮氣にたゞよふ屋氣樓の
 すゝる種なるならひや、
 おくがれ心しのびに、
 空ぼろし描きし思ひあがり、
 やがて吾世の轅を、
 星への縁か、——おほみ諭し。

十

聖言葉や、聞くだに、
 和魂ゆらぐよるこび。
 相見よ、別れよ、故こそあれ、
 わが世の途の事榮、
 また躓きのいづれか、
 おほ慈悲——影身の心ならぬ、
 み恵み、それを思ひて、
 微笑み泣くかな、涙もろに。

(三十七年十月)

虹の歌

一、旅人

木かげをいでよ、
 雨はれて、
 雲洩るひかり、
 はなやぎぬ。

肩の荷ぬれて、
おもくとも、
宿とる程の
ひまとのみ。

旅ゆくひとよ、
口ずさみ、
小唄となふる
ならはしや。

そよ折からの
ものと見よ、
ゆくて國原
虹かゝる。

京への道に、
山あらば、
虹見て攀ぢよ、
つゝらをり。

谿の棧路の
けはしくも、
脚のつかれは、
忘れむ。

京への路に、
水あらば、
虹見て乗れよ、
舟わたり。

瀬々のすべりに、
うつむかば、
舟酔ごゝち、
なやむらめ。

里のわかもの、
名は知らず、
虹の橋づめ、
見てましと、

ながら堤を
走るまに、
影うしなひし
ものがたり。

今し歌占、
をはらぬに、
虹は早くも、
くづほれむ。

あゝ世になにか
もろからぬ、
美しものもの
あるべしや。

されば旅寝の
ゆめまくら、
涙がちなる
夜頃かな。

一夜は米の
 くるくとも、
 をとめが胸の
 白からば、
 さぞな夜ながの
 旅ごゝち、
 都ごゝろに、
 なぐさまむ。

二一 獵人

祥こそよけれ、
 煌の環の
 虹をいさみに、
 かなたへと。

くぬぎ木原に鹿の子の
 逃のすがたを失ひて、
 峰越の路にわけくれは、

あな遠山の山の端に、
虹こそかゝれ、花やかに。

南の邦の繁山の
葉もりの影に片ぬれて、
小笹のそゝけ胸わけに、
陰路をわたる獅子の背の
たてがみ色も見おとらめ。
この日天路の南より、
北なるはてへ懸けわたす、

黄金反橋虹の輪の
かゝるにはひに比べては。

神坐すところ、高御座、
天つ童部——添ひ星の
忌火夜な夜な燃るかた、
日は顔ばせのかゝやきに、
月は胸乳のふくらみに、
星は腫子のきらめきに、
雲は御髪のなびきにと、

おほせられたる象りの、
 物こそあれや、虹の橋、
 天の榮えと營みの
 ときはの花にほへよと、
 大み額にかざします
 黄金の冠まびさしの
 光によそふ玉の映え。

あゝ真鳥の羽身にそへて、
 雲路はるかに往くべくば、

天の反橋はなやぎの
 かなたの邦にまゐのぼり、
 檀弓真鹿兒矢たばさみて、
 おほ宮どころひひ鳴の
 天つ狐を追ひすがり、
 すぐよか者の稱へ名に、
 とのゐ姿やゆるされて、
 玉の御階につかまつり、
 御饗さがりの大御饗に、
 甘らの酒も掬むらむを。

さもあらばあれ、雲居路に、
黄金のかむり、虹の環を、
高草の村の野うさぎに、
蒲の穂絮のよそほひを、
法吉の里のうぐひすに、
心やりなるさへづりを、
わかちし神のみめぐみは、
また里ずみの獵人に、
妻をこそ賜へ、うら若き

わが世の誇り、これぞこの
天つ座へのあくがれを、
やがて眞白のやは肌は、
酔ひ足すべき使ひ姫。
今日もぞ、身様なよびかに、
萱屋の門の心まぢ、
み山がへりの人もやと、
峰越の路に見惱ひて、
さぞな花なるまなじりの
うるみ勝にや居凭るらめ。

あな谿岨の木がくれに、
尾長山鳥音こそすれ、
わか髪あをき山祇の
神もまもれな、窺ひ、
これよ、待れの今日の日の
唯の幸どとたはむれて、
涙もろなる乙嫁の
笑顔まるにや解くべき。

三、情人

男

花野繁路の
そゝろゆき、
うれしや、空に
虹かゝる。

身に初戀の
もゆればか、

胸こそをどれ、
今もはた。

女

若びとふたり、
草をふむ
野には、懸想の
ゆめ花に。

秋雨はるゝ

染姫の
宮には、虹の
さかばえや。

男

君がむすべる
花の環は、
頸ひとへに、
足はじを、

おほみ手練や
天つ女は、
千尋にあまる
煌の輪を。

女

かゝる日人は
たはむれじ、
反わたどの、
ゆきかひに、

あまつ八少女
さるさると、
玉衣ひきて、
舞ふらめを。

男

歸依の和魂
人玄れず、
沈黙ふかげの

酔よひごごちち、

天あまつおほ路ぢに、

玉たま沓ぐさの

足あし音を聞きくも、

かゝる日ひか。

女

さもあらばあれ、

手たばさみの、

君きみが右みぎ手てなる
玉たまやなに。

左ひだりは、「戀こひの

鶺鴒ささぎどり鳥

然さな。」と、吾わが手てを

捲まきながら。

男

こは、才ざいたかき

うたびとの
戀ものがたり、
文の巻。

落葉ばやしの
木がくれに、
『鶴鷄』とともに、
讀みいらめ。

女

この日野なかの
そゝるゆき、
もの深げなる
夕ながめ。

大みぢからの
花やぎに、
酔こそ足へ、
わが心。

男

傀儡まはしの
ひとさしに、
うき世の^{さま}様も、
見るといへ。

涙もろなる

歌の^{まき}巻

これや、二人の
おもかげを。

女

いにしへ人の

巻にのみ、

男ひじりの

戀ぐさや。

垂乳まろなる

ふくらみに、

隠れの玉は、

見みがくしに。

男

君きみは野のなかの

さゝら水みづ

われを直路ただぢに、

みちびきぬ。

この日ひ花野はなのの

そゝるゆき、

ふたゝび書かきの
名なはいはじ。

女

いざ君きみいそげ、

かなたなる

野のなかの阜をかの

くぬぎ原はら。

虹にじの環わかげに、

手をつれて、
鹿の子の如く、
舞はしめよ。

四、海人

嶋山かげのいさり舟
幸こそ足へ今はとて、
振さけあふぐ目移しに、
映ゆるや天の棧づくり、

こがね色なる虹の橋。

波の穂しろくほのめきて、
引汐かへるかなたには、
龍の宮居のわだつみが、
長日のゆめ路いまさめて、
御門柱の居がくれに、
梁たかきおほぞらの
反わたどを見やるにも、
さこそは天の大兄の

手だれや花に讀ふらめ、
遠つ海の音どよもしぬ。

この日、一葉の舟を浮け、
八潮路遠に漕ぎためて、
磯まにかへる海人の子の
たゆたの滑り、さながらに、
こがね煌の環、ゆるされの
玉の宮居にいたるやと、
海路の廣み、笑みがほに、

檝木にすがる浪もこそ、
眞白手あげて馴寄るかの
心あがりのまよはしや。

をさな遊びのそのかみに、
離れ小島の山めぐり、
姫百合折るとさす舟の、
磯まを遠く漕ぎいでて、
渦潮にまよひ入り、
今はと見えし危さに、

楫取神を念じつゝ、
手溜りふとき楫がらの
早緒も脆にちぎれよと、
楫音たかくきしらせて、
潮瀬はるかに避けくれば、
折こそあれや、白虹の
天路にかゝる花やぎに、
童どゝろよ、ほこりかに、
舟側とゞと踏みはりて、
勝閑たかく呼ひしが。――

今漕ぎなれて、さながらや、
身は海神の家の子に、
晝はひと葉の小を舟、
潮の八百路にわけいでて、
漁歌のどよみたからかに、
曳網ながくたぐりつゝ、
夜は蘆原の楫まくら、
浪のゆらぎを聞馴に、
龍の宮女にさむらひて、

鶴の羽葺屋の濱びとに、
宵の通ひをゆめみつゝ、
老いくちぬべき蟹が世に、
おほみ心や、日こそあれ、
ふたたび虹の花やぎに、
すぐよか心をどりては、
身は海神の孫ながら、
魂はみ空にあくがれて、
星の煌路の天の座に、
甦へるかと思はれや、――

神よこの日のおぼろげを、
やがてわが世の最果の
その日、朗らに見せたまへ。

あゝわたつみの夕ながめ、
たゆらに震ふ浪の穂に、
夕映あかりうすらぎて、
空には、かへる水鳥の
羽音のみこそ掠れゆけ。
いでや、かなたの浦めぐり、

入江の蘆に舟よせて、
夜をやすらなる夢にこそ。

五、農人

虹の環しるみに、
禍日さすと、
いにしへ人らの
心よわや。

今日しも野なかに、
小雨はれて、
うかぶや、玉橋
天路花に。

里むら萱屋に、
人氣見えて、
粉磨ぐるまの
唄のわたり。

あるひは、培^{つむ}樓^れの
くづれ踏^ふみて、
窖^{せう}なる土^ち龍^{りゆう}の
路^{みち}をたちぬ。

わが世^よのせつなさ、
いつはあらず、
日^ひも夜^よも隙^{ひま}なき、
宿^と直^のご^みこち。

樵^{せう}夫^ふは、圍^か爐^ろ裏^りに
脚^{あし}をのべて、
雪^{ゆき}の日^ひま^とひの
笑^{あは}れ^みに酔^よふを、

不^ふ如^じ意^いや、われらは
しづれ小^こ路^ろ、
麥^{むぎ}ふむ兔^{うさぎ}を、
山^{やま}に追^おひぬ。

獵人は山路の
瑞枝がくれ、
湧きちる岩井の
水に飽くを、

不如意や、われらは
眞夏日なか、
ぬるみの水田に、
莠ぬきぬ。

せめては刈しほ
われは顔に、
はかなの思ひを、
よせぬべきや。

八束穂みだれて、
さやぐゆふべ、
秋の香くゆりて、
野こそかをれ。

風ゆき蚊ばしら
浮ぶほとり、
童女は繪によき
様に飛べり。

この時、さかえの
こがね鬘、
千尋の虹の輪、
あまの宮に。

八十日夜、山田の
宿直やつれ、
さてこそ慰め、
笑顔花に。

小走り、木かげに
ひざまづきて、
忍びに祈るや、
心ゆるび。

夕雲かけ透き、
光させど、
稲葉のしめりは、
乾こそあへぬ。ぬ

小者よ、稻鎌
今日は磨がで、
濡身の犢に、
草をかへよ。

厨房の酒がめ、
口をきれば、
うまらや、醗に
泡も咲きぬ。

こよひは、興作を
まねききたり、
田の面の實りに、
掬みて酔はめ。

六、隱者

一

この日なべての和魂
さめよと斯くや虹の環
南は八千尋綿津海に
北は八千尋野ずゑに
かくるは玉の反橋
そびらは遙かに雲に入りぬ
わな屈りの世にしも

自然ぞあまりに大いなりや。

二

眞闇の胞衣よやふれて
天地なれるそのかみ
ひかりの若子は空にあれと
虹もぞ天の常ばな
隠れの宮にねむれど
をりをり目ざめの時し來れば
おほみ額をまといて

さかえと力の代こそ見すれ。

三

あゝ常若の八をとめ、
忌火さゝぐるかなたの
不壞なる營み、——大みぢから、
天つ心のひらめき、——
われら日陰のなよ草、
あまりにか弱き身にしあれど、
この夕映の氣壓れ、

奇しくもせつなの氣こそ見えね。

四

そよ、心憂のまよひや、
わが存への最果、
その日の疑ひ胸に入りて、
身は物怖の心地に、
わなゝきやまぬ日頃を、
今日しも天路の七つ色に、
見ればか、あはれ人の世

さこそその現れすがた花に。

五

われら常久の瞬き、
やがては消ゆる身ながら、
あくがれ絶えせぬこゝろ魂の
常新なるともりや、
この世さてこそ虹の環、
かなたに炎の宮居ありて、
その羽含みの深にや、

醸し、生命の火にはあらぬ。

六

あゝ現し身のをはりに、
わが世寂しき回顧、
時切の暗谷——天の常陰、
すぐよか心さながら
虹なる煌を見るにも、
微笑みかへらめ、これや嘸な、
歸るさならめ、隠れの

おほ宮常世へ慈悲の御園。

(三十二年十一月)

二十五絃畢

正誤表

三三頁九行	葉分	は	葉分
三四頁二行	夏の眞晝	は	眞夏日なり
六二頁六行	片かけは	は	片かけに
九五頁八行	法起菩薩	は	法起菩薩
九七頁八行	玉の顔	は	玉の顔
一一頁三行	黒寶	は	黒寶
二〇四頁八行	空	は	空
二〇八頁三行	水草	は	水草
二四〇頁六行	十六年	は	三十六年
二四二頁九行	酔	は	酔
二五九頁八行	路に	は	路に
二九六頁四行	あへぬ	は	あへぬ

明治三十八年五月十日印刷
同 年五月十三日發行

二十五絃

實價金壹圓



著者 **薄田淳介**

東京市日本橋區通四丁目五番地

發行者 **和田むめ**

東京市京橋區南小田原町二丁目九番地

印刷者 **中野鏝太郎**

東京市日本橋區通四丁目角

發行所 **春陽堂**

東京市京橋區築地三丁目十五番地

印刷所 **帝國印刷株式會社**

再版

心のあと

出廬



幸田露伴著 久保田米齋畫

洋裝四六判
紙質精良
印刷鮮明

是れ一編の
長詩なり

實價八拾錢
郵税拾錢

五版

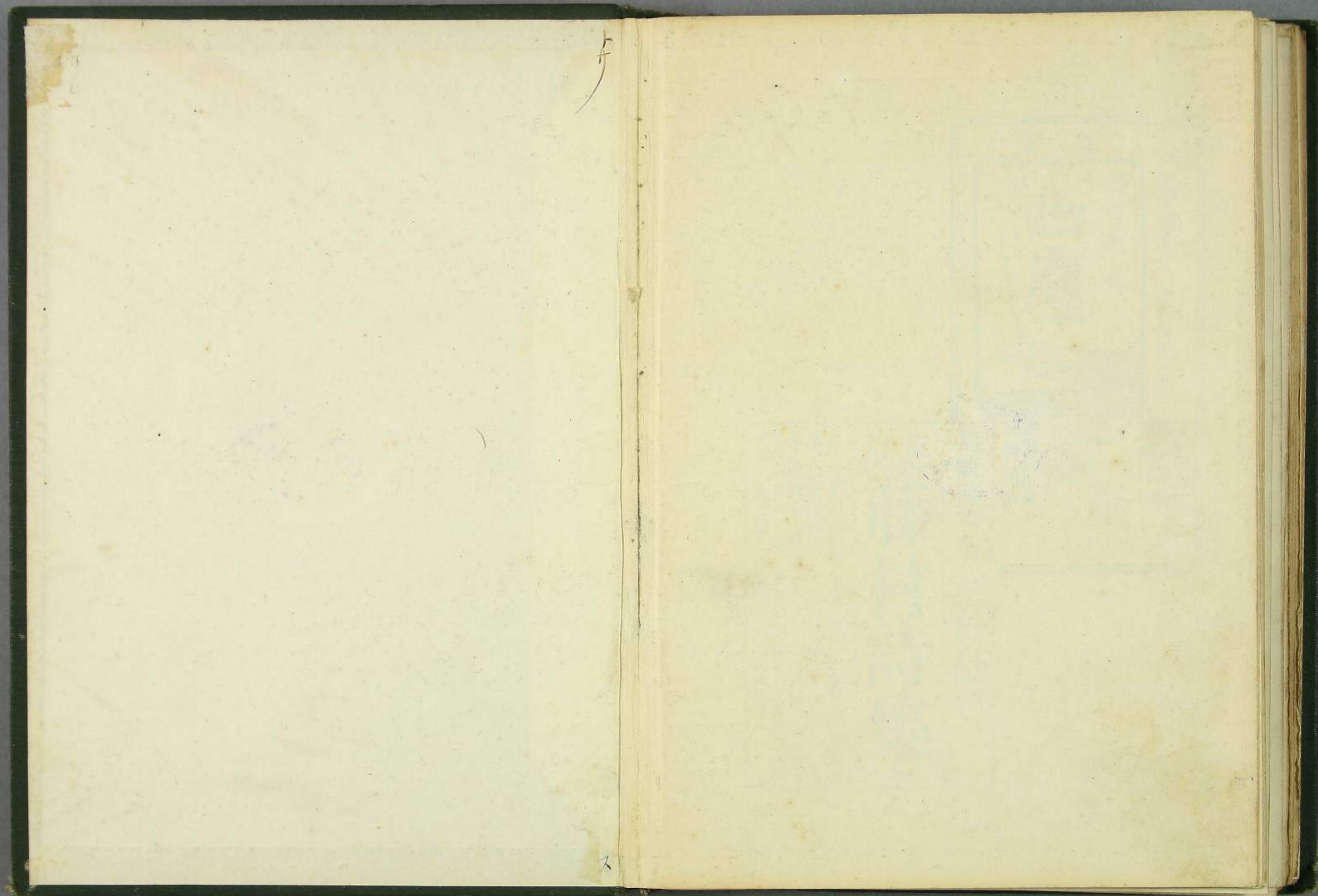
島崎藤村著

和田英作新意匠
石版彩色畫挿入

藤村詩集

洋裝四六版頗美本 實價八拾錢 郵税拾錢

是、新體詩集なり。是、若菜集と夏草と一葉
舟と落梅集とに散在せる一切の詩歌を蒐集せ
しものなり。是、著者が開拓せし詩想の道路
なり。是、新しき藝術に入るの門なり。



f

r